

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第6集

堺窪遺跡Ⅱ

1 9 8 2

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第6集

堺 窪 遺 跡 II

1 9 8 2

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

近年にみられる急激な都市開発は、諸環境の変化を発生させておりますが、埼玉県南西部首都東京に隣接する所沢市では、昭和50年ごろから市街化地域が一層拡大されました。人口の増加と宅地の増大は一体の関係にあります。この結果、所沢台地と一般に称される台地上にも住宅地化が波及し、かつてそこに営まれていた遺跡群は少なからぬ影響を受けてきました。

堺窪遺跡は所沢台地上に存在する広範な縄文時代の集落址であり、先土器時代の遺物も発見されています。県立所沢高等学校敷地の全面積はほぼ遺跡の中にあります。近傍には台地の肩部に諸遺跡が連なって築かれていたことも判明し、昨今では往時をしのぶばかりです。当遺跡は東側に連続する東の上遺跡が市街化の波にのまれてゆく中で、比較的保存状態の良い遺跡であります。

しかし、すでに53年度には、旧校舎の改築に先立って失われる部分の発掘調査と記録保存を実施してまいりました。ここに『堺窪遺跡Ⅱ』として発行する報告書は、第2次発掘調査として昭和55年度に機械設備等の諸施設の建造と、第3次発掘調査として同56年度に格技館を建設するためにやむを得ず行った発掘調査の成果を一冊にまとめたものです。

本発掘調査は、埼玉県教育局学校建設課の委託を受けて、第2次調査は同県教育委員会が直営で、第3次調査と整理作業を同県埋蔵文化財調査事業団が行ったものであります。また、発掘調査に際しまして、所沢市教育委員会、所沢高等学校関係各位には協力を賜わり、深く感謝致しております。なお、今後とも広く御指導、御鞭撻賜わりますようお願い申し上げます。

昭和 57 年 3 月

財団法人
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 長 井 五 郎

例 言

1. 本書は、昭和55年2月26日から同年3月31日と56年2月2日より3月7日まで、所沢市久米1234番地における県立所沢高等学校の諸機械施設と浄化槽および格技館の建設工事に先だって実施した第2次・第3次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、埼玉県教育局学校建設課の委託を受けて、第2次調査を文化財保護課、第3次調査を同保護課の調整により、同県埋蔵文化財調査事業団が行った。
3. 発掘調査の担当は、第2次調査を庄野靖寿、第3次調査を坂野和信がそれぞれ担当した。
4. 本報告書の編集は坂野和信が行った。各章の執筆は下記に示す通りであるが、横川好富、増田逸朗及び編集者はこれらの文体を整えて、必要な加除筆を行った。
Ⅰ 井上尚明、Ⅱ・Ⅲ1・2・3B、Ⅳ1・3、Ⅴ1 坂野和信、Ⅲ1・2・Ⅳ1 庄野靖寿、Ⅲ3A Ⅳ2 川名広文、Ⅴ2 小暮広史、Ⅵ1 Ⅵ2 佐藤典邦
遺構、遺物実測図等の製作は、各執筆担当者が主にあたった。石器の実測・製図は樋口誠司、西口正純によっている。石質の鑑定は、埼玉県立自然史博物館本間岳史氏に依頼した。また、遺構の写真撮影は各調査担当者による。遺物の写真撮影と図版製作は編集者が行った。
5. 発掘調査にあたり、所沢市教育委員会三上定義、並木 隆の両氏には多大な援助と協力を得た。

目 次

序	
例 言	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地	3
III 調査の経過	6
1. 概 要	6
2. 調査の方法	6
3. 調査日誌	8
A 第2次調査	8
B 第3次調査	8
IV 遺 跡	9
1. 概 要	9
2. 第2次調査	9
3. 第3次調査	11
V 遺 物	14
1. 土 器 類	14
A 土器の分類	14
B 第2次調査出土の土器	16
C 第3次調査出土の土器	17
2. 石 器 類	17
A 第2次調査	18
B 第3次調査	20
VI ま と め	24
1. 遺構について	24
2. 出土土器について	24

図 面 目 次

遺 構 実 測 図

1. 第2次調査	A地点 遺構全体図	29
2. 第2次調査	B地点・E地点遺構全体図	30
3. 第3次調査	遺構全体図	31
4. 第2次調査	1号住居址A地点住居址・ピット実測図	32
5. 第2次調査	1号住居址土層・ピット断面実測図	33
6. 第2次調査	B地点・E地点土層実測図	34
7. 第2次調査	E地点遺構実測図	35
8. 第3次調査	1号住居址平面・土層実測図	36
9. 第3次調査	1号住居址炉址・埋甕・各柱堀方実測図	37

土 器 類 実 測 図

10. 第2次調査	1号住居址、第3次調査	1号住居址出土土器	38
11. 第3次調査	1号住居址、炉体土器・埋甕		39
12. 第2次調査	表土・包含層出土土器		40
13. 第2次調査	表土・包含層出土土器		41
14. 第2次調査	1号住居址出土土器		42
15. 第3次調査	1号住居址・包含層出土土器		43
16. 第3次調査	1号住居址出土土器		44

石 器 類 実 測 図

17. 第2次調査	1号住居址出土石器	45
18. 第2次調査各地点・第3次調査各地区	出土石器	46
19. 第3次調査	1号住居址出土石器	47

挿 図 目 次

1. 周辺の遺跡分布図(1:25000)	3
2. 遺跡周辺の地形図(1:5000)	4
3. 第1次～第3次調査地区(1:1000)	7
4. 掻器、尖頭器、ナイフ形石器実測図・写真	21

表

第1表 第2次1号住居址	10
--------------	----

図 版 目 次

遺 構

1. 堺窪遺跡 南西半部（第3次調査）1：750
2. 第2次調査 1号住居址 上東・下南側より
3. 第2次調査 1号住居址 上配石・下出土土器
4. 第2次調査 1号住居址 上炉址状遺構・下E地点土壌群
5. 第3次調査 1号住居址 上・下北側より
6. 第3次調査 1号住居址 上炉址・下炉体土器と掘方
7. 第3次調査 1号住居址 上埋甕・下埋甕と掘方
8. 第3次調査 1号住居址 上・下西側より
9. 第3次調査 1号住居址 柱掘方上A柱穴・下B柱穴
10. 第3次調査 1号住居址 柱掘方上C柱穴・下D柱穴

土 器 類

11. 第2次調査 1号住居址出土土器
12. 第2次調査 1号住居址出土土器
13. 第2次調査 上E地点・下A地点出土土器
14. 第3次調査 1号住居址出土土器
15. 第3次調査 1号住居址上埋甕・下炉体土器
16. 第3次調査 1号住居址出土土器

石 器 類

17. 第2次上・第3次調査下各1号住居址出土石器
18. 第2次調査上各地点・第3次調査下各地区

I 調査に至る経過

堺窪遺跡については、昭和53年度に県立所沢高等学校の防音校舎改築工事に伴い、県教育局文化財保護課が第2次発掘調査を実施している。縄文時代中期の集落址が確認され、すでに調査報告書も刊行されている。

堺窪遺跡は所沢市№25遺跡として周知されており、かつて高校敷地内からはほぼ完形の加曾利E式土器が出土している。大部分が校舎、校庭になっているため、その範囲や性格については不明な点が多かった。しかし、第1次調査により遺存状態も良好であることが確認され、勝坂期の住居址等の遺構が発見された。したがって、他の部分を工事する場合にも調査を行うことが必要となった。

その後、所沢高等学校では自転車置場、浄化槽等の諸施設の整備あるいは格技館の建設が計画されたので文化財保護課では県財務課及び学校建設課と協議を進めていた。調整の結果、工事計画の変更は無理であるということであるため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。自転車置場、浄化槽などの建設用地約300㎡については昭和55年度に実施することになり、文化財保護課が執行委任をうけて調査を実施した。法的手続をとった後、昭和55年2月26日から発掘調査が開始された。文化庁からは55委保記第33-701号をもって、文化財保護第98条の2に基づく埋蔵文化財発掘調査通知を受理した旨の通知があった。

格技館建設については、改めて財務課と協議をして、調査期間等の調整を進めた。第1次、2次の発掘調査は文化財保護課が直営で実施してきたが、昭和55年4月1日に増大する公共事業に対処するため財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が設立され、これまで文化財保護課が実施してきた発掘調査を引き継ぐことになった。調査は昭和55年度中に実施することになり、調査範囲も約460㎡と決った。

埼玉県からは文化財保護法57条の3に基づく埋蔵文化財発掘通知を、事業団からは同法57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が文化庁へ提出され、昭和56年2月2日から発掘調査が開始された。

文化庁からは昭和56年2月8日付け委保第5の255号をもって調査届を受理した旨の通知があった。

発掘調査の組織

1. 第2次発掘

主体者	埼玉県教育委員会	教 育 長	石 田 正 利
事務局	埼玉県教育局文化財保護課	課 長	杉 山 泰 之
企画調整	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第二係長	栗 原 文 藏
			柿 沼 幹 夫
			駒 宮 史 朗
庶務経理	埼玉県教育局文化財保護課	庶務係長	奥 泉 信
発 掘	埼玉県教育局文化財保護課	文化財第三係長	横 川 好 富
			庄 野 靖 寿

2. 第3次発掘及び整理

主体者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	長 井 五 郎
		副 理 事 長	本 郷 春 治
		常 務 理 事	渡 辺 澄 夫
庶務経理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管 理 部 長	伊 藤 悦 光
			関 野 栄 一
			福 田 浩 人
			本 庄 朗 人

3. 発掘・整理

埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調 査 研 究 部 長	横 川 好 富
	調 査 研 究 第 三 課 長	谷 井 彪
		坂 野 和 信
		小 暮 広 史
		佐 藤 典 邦
		樋 口 誠 司

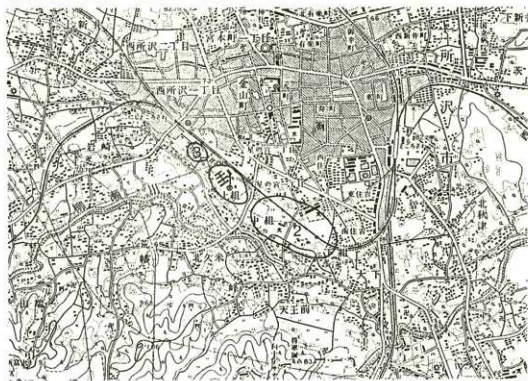
4. 協 力

所沢市教育委員会
 県立所沢高等学校
 地元関係者

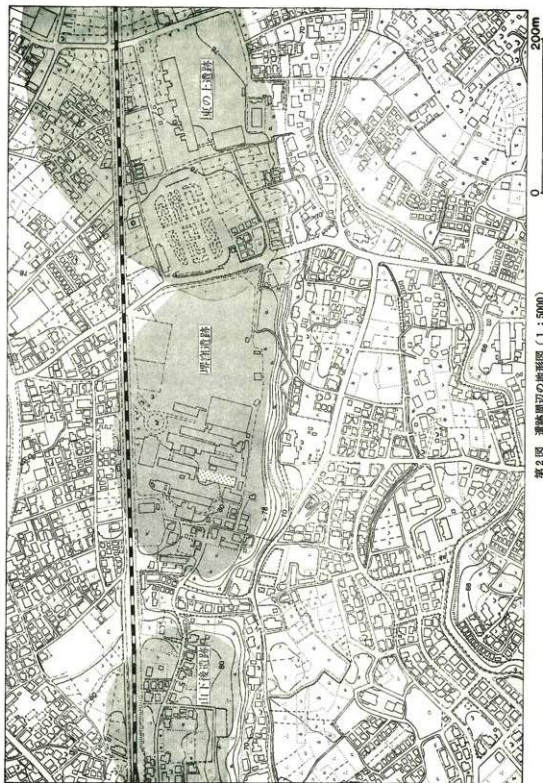
Ⅱ 遺跡の立地

関東平野の西南部にひかえる武蔵野台地は、古多摩川を主營力とする段丘状台地で、標高50~100 m前後、東西約40kmの広範な地域を占めている。北から北東の境は荒川、南西から南東を現多摩川に限られている。この台地西端部には多摩川を隔てて狭山丘陵が存し、東北部には所沢台地が舌状に連なっている。

本遺跡は、狭山丘陵に源を発して北東流する柳瀬川に開析された所沢台地の南縁部、標高約80 mに位置し、南に広がる沖積地とは約15 mの比高差をもって立地する(第1図1)。また、遺跡は台地の南縁部に沿って通る西武池袋線を北縁とする長軸北西-南東約400 m、短軸約200 mの楕円形状の範囲75 aの面積を有するものとみられる(第2図)。当遺跡の大半は、現在県立所沢高校の敷地となっているため、学校運営上の制約を受けている。昭和53年度に実施した第1次発掘調査により縄文時代中期を主体とする同早期からの複合遺跡であることが判明している。この遺跡の東側に連なって東の上遺跡(第2図)が存在しており、その中央部は縦走する西武池袋線に破壊されているが、本遺跡の約2倍の面積を有する大規模な集落址とみられている。現在までに5次にわたる調査の結果、歴史時代に主要な位置を占める縄文時代からの良好な複合遺跡であることが明らかにされている(註1)。縄文時代早期・中期の土器と8世紀から9世紀代の竪穴住居址群が検出されている。当遺跡の西側に隣接して存在する山下後遺跡(第2図)は、未調査であるが縄文時代中期の土器等も



第1図 周辺の遺跡分布図(1:25000)



第2図 有楽町周辺の地形図 (1:5000)

採取されている。

ところで、武蔵野台地の西東部で特徴的なことは、水量の乏しい河川が多くみられることであり、所沢市内に流入するものは先記の柳瀬川と同様、狭山丘陵に水源をもつ東川、砂川、林川、不老川等である。このうち東川は坂之下あたりで柳瀬川と合流するが、後三者の下流には水音を聞くものが少ないとされている。不老川(トシトラズ川)は、その名の示す如く冬期には河床に流水が浸透してしまい、河川が年を越すことがまずないとされるほどである(註2)。現在ではかくの如く水量の乏しい河川の地域であるが、遺跡の形成は早くから始まり先土器時代から歴史時代を通して知見されている。本遺跡の周辺に展開する諸遺跡の状況については、第1次調査時点とほぼ同様であり、既報告『堺窪遺跡』『遺跡の立地と環境』(註3)の項でふれたとおりである(参照されたい)。

註

- (1) 飯田充晴、金井塚良一他『東の上遺跡』所沢市文化財報告第1集 所沢市教育委員会 1976年
- (2) 『武蔵野』第59巻第2号 武蔵野文化協会 1981年
- (3) 井上尚明、中島宏『堺窪遺跡』P3～P5 埼玉県遺跡発掘調査報告書第31集 埼玉県教育委員会 1979年

Ⅲ 調査の経過

1. 概要

本遺跡は、県立所沢高等学校の全敷地に及ぶものであるため、校舎の増改築や諸設備の拡充に伴う事前の調査が必要とされる状況下にある。第2次調査は、諸設備の建造に先立つ発掘調査である。25㎡から110㎡程のごく小規模な調査地が随所におよび、約315㎡の面積である。便宜上南より東回りにA～Eの5箇所の調査地点(第3図)を仮称した。A浄化槽、B変電室、C受水槽、D自転車置場、E機械室である。このうちA・B・Cの調査地は、第1次調査地域(B棟)の西半部約800㎡(第3図)に隣接している。第1次調査では、竪穴住居址1軒、土壇13基、ピット73基、溝1条等が検出されている。住居址はB棟の東端から検出されたもので、勝版Ⅲ式に属する炉体土器が認められた。

第2次調査で検出された遺構は、竪穴住居址1軒、土壇25基、溝1条である。A地点で検出された住居址に埋設された炉体土器は、第1次のもとの同時の所産と解されるものである。この地区では、下層からステンパーとフレイク、チップも検出されたが、安定した出土状態ではない。B～Dの各地点では、顕著な遺構がみられなかった。B地点は古代以降の溝1条。D地点は、東西27m、南北4mの調査区であったが、西端で土壇1基を確認しただけにとどまった。E地点は、A地点から北70m隔てた所であって、土壇11基が検出されている。

第3次調査は、格技館の建設に伴う調査で、第2次調査のA地点の南約5mを調査区の北端とする南北約33m、東西14m、約460㎡の面積である(第3図)。南東隅の一部は旧校舎によって破壊されており、北寄りの地区ではガス管の埋設による事故誘発の危険性から調査を避けた箇所もあった。本調査の結果、竪穴住居址1軒、土壇1基が検出された。住居址は2次調査A地点の南約20mで、加曾利EⅠ式に属する埋壘と炉体土器を伴う、遺存状態の良好なものであった。

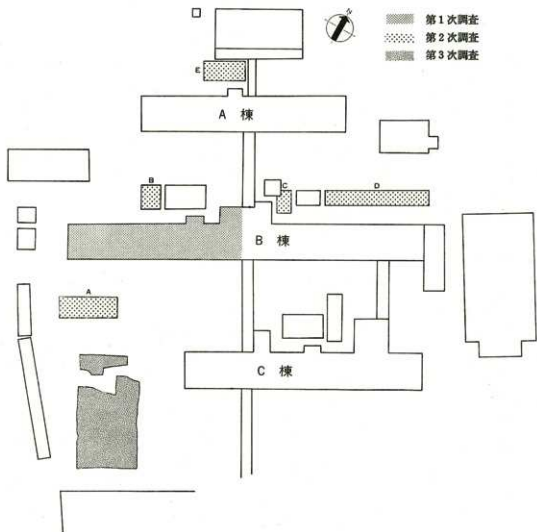
2. 調査の方法

第2次調査は、先記のとおりごく小規模な範囲の調査を随所で行うため、小地区を設けず、各調査地点の状況に応じた方法を採用した。第3次調査では小規模ながら比較的まとまった調査区であったことから、6mの小地区を設定して行った。南より小文字アルファベットa～g、東から1～4に区画して各々を組合せて表示した。したがって小地区の表示は、例えばa1となる。

ただし、各調査は国土調査法による第9座票系(以下国土方眼と略す)に従って基準点を設定した。下記に主な各調査地区の国土方眼座票を示す。

第2次調査A地点南限X—24K191.00m、東限Y—33K459.50m、E地点北限X—24K117.50m東限Y—33K465.00mである。

第3次調査北限X—24K186.40m、南限X—24K212.00mである。



第3図 第1次～第3次調査地区 (1:1000)

3. 調査日誌

A 第2次調査

- 2・26 A、B地点の表土を重機で除去し始める。
2・27 D地点の表土層を重機により除去し始める。併行してC地点は手掘りで表土を除く。
3・3 D、C地点をローマ層上面で精査したが何ら遺構は確認されず、遺物も出土しない。午後、E地点の表土を手掘りで取り除く過程で、縄文中期の土器片が数点出土する。
3・4 E地点の遺構確認を進める。併行して、A地点を東側から精査し、小ピットが確認される。
3・5 E地点の遺構確認を続ける。A地点では、住居址一軒、小ピット・土壇数基が存在することが判明する。縄文中期土器の出土。
3・10 E地点のローム面を確認する。A地点は、堅穴住居址一軒、小ピット・土壇10基。その一部を調査する。
3・11 A地点の住居址の調査。E地点では、土壇(ピット)が12基確認され、各々の調査をする。
3・12 E地点はピット土層断面図をとる。B地点の表土を掘り下げ、精査した結果、堅くしまったロームの傾斜面と溝状遺構を確認する。
3・13 E地点を完掘し、全影写真を撮影する。A

B 第3次調査

- 2・2 発掘調査区の設定。南北33m、東西14m、約460㎡となる。重機で表土層の除去。北側の一部を手掘りで試掘する。
2・3 表土の除去を続行。表層から0.3m程は攪乱されていることを確認。
2・4 測量基準点を調査区に移す。調査区の地区割、6×6mの小地区を設定する。d2、d3地区にまたがる堅穴住居址1軒、土壇1基確認。平面不整形円形を呈する。
2・6 住居址を一部破壊した旧校舎に伴う排水溝が南と東でみられ、中央部で直交していることを確認。深さ約30cm、一部床面を削り込んでいる。
2・7 調査区域の遺構検出。外には顕著なものがないことを確認。
2・9 1号住居址の調査。土層観察用ベルト東西南北に設定。加曾利EⅠ式土器検出。
2・10 床面を中央部で一部検出。ローム層の硬く締った面を認める。
2・13 土器分布図作成と土器の取り上げ。埋壘・石囲い伊検出。各々の掘方を確認。石囲いの中に伊体土器を検出する。
2・16 遺物の取上げを終了する。柱掘方および柱

地点は、ピットの土層断面図をとる。B地点を概ね完掘する。

- 3・14 A地点のピットを完掘する。B地点の全影写真を撮る。
3・17 A地点のピットの完掘の写真を撮影、住居址の調査を進める。B地点の完掘写真撮影、土層観察を行う。
3・18 A地点のピットの平面図をとり、A-1号住居址の床面、壁等を検出する。B・E地点の遺構の平面実測を行う。
3・19 A-1号住居址の南半分を掘り上げる。E地点は先土器時代の調査を始める。
3・24 A-1号住の柱穴、炉址状土壇等の調査。
3・25 A-1号住の写真撮影。A地点東側部のローム面を薄く削いでいく過程で剥片を検出する。
3・26 A-1号住の平面実測等を行う。
3・27 A地点東側部で先土器時代の遺構・遺物の調査を進める。
3・29 A地点東側の土層観察を行う。
3・30 器材を撤収し、調査を終了する。

痕跡を5箇所で見出し、各々を写真撮影。

- 2・19 柱掘方、柱痕跡の調査。周溝の検出。東西で深く掘り込まれた箇所を確認。周溝内の柱掘方を検出。ほぼ等間隔にみられる。
2・20 住居址と周辺の清掃。写真撮影後、平面実測を行う。C2・3小地区の黒褐色土から燃余土器破片出土。
2・23 西側柱掘方の立ち割り調査を始める。柱掘方断面にも明瞭な柱痕跡が検出される。北側b2・3地区を一部拡張する。第2次のA地点との関係から石器類の存否が注目されたが未検出。午後降雪のため調査を中止する。
2・24 柱掘方立割り続行。伊体土器は体部上半がほぼ完形。埋壘は口縁部のキャリパー部分が皿状に遺存し、南に傾斜している。
2・27 柱掘方の写真撮影。炉址、埋壘の正面図を作成。各々の土器を取り上げる。住居址は完掘。
3・2 住居址と調査区全域の写真撮影。
3・3 学校関係者に遺構の説明を行って実質的な調査が終了したことを伝える。
3・7 この日までに調査区の埋戻し作業が終了。

Ⅳ 遺 跡

1. 概 要

遺跡は台地の肩部に営まれている。その北西部は、支谷によって山下後遺跡と隔てられているが、南東側は東の上遺跡に向ってわずかな傾斜で低くなりつつ連続している。南側は柳瀬川に開析された沖積地を見降す位置である。

当遺跡の調査は、第1次から3次のいずれもが推定範囲の南西寄りであるため、全容を把握することは困難である。ただ、上記の調査成果を概観すれば、第2次・3次調査で検出された住居址付近を集落の南西端として把握することが可能であろう。第1次調査において検出された勝坂Ⅱ式の住居址が頭南西端に位置するとみられたが、第2次調査でその西約40mに同時期、第3次調査によって、この南約20mにも加曾利EⅠ式の住居址が検出された。つまり後2者の住居址は、台地の南西縁に隣接しているため、地勢の制約からは南西端とみられる。

調査地の基本層序は、第1次調査地区と第2次・3次調査地区も基本的に同様で、上層から順に黒色土層、黒褐色土・暗褐色土層、漸移層を経て武蔵野ローム層を基盤としている。第3次調査地区は、全面に黄褐色の盛土も施されていたが、下部にはこの影響は及んでいない。したがって、漸移層の上面を実質的な遺構検出面とすることができる。また、第2次調査E地点と3次調査地区南端のa1地区では南北に105mを測るが、遺構検出面はほぼ一定で標高約79m前後である。

第2次・3次調査で検出された各遺構は先記のとおりであるが、2次調査A区で検出された堅穴住居址は、北半部に未調査部をのこすものであり、3次調査b1・2、c1・2区の一部は、旧校舎による破壊が著しく詳細は把握されなかった。調査期間と対象の極端な制約を解決する計画的発掘調査の実施が期待される。

2. 第 2 次 調 査

第2次調査における発掘地点はA～Eの5地点であり、そのうち遺構が確認されたのはA・B・Eの3地点であった。これらはローム層の上面で検出された。

A地点（第4図、図面1・4・5、図版2～4）

A地点で確認された遺構は、堅穴住居址1軒、土壇、小ビット計10基である。また、東側のソフトローム層からは、チップ類約65点が検出されたが、製品は検出されなかった。

第1号住居址 調査区のはほぼ中央部北寄りに確認された。調査範囲が限られていたため約3分の範囲を調査したにとどまった。平面形は北東～南西方向に長軸をもつ楕円形と推定され、長軸5.7m短軸4.9mの規模と考えられる。外部施設や拡張は認められなかったが、同じ堅穴掘方内で建替された可能性はありうる。住居址の南側部分は良好な遺存状態である。その北側部分は覆土上層が攪乱を受け掘方も削平されている。しかし、床面にまでは及んでいないため、床面から掘り込まれる内部施設等は良好に遺存していた。検出面から床面までが浅いことにもあって、壁の立ち上りはかな

り緩かで、浅い皿状の掘方である。

ビットはおおむね壁に沿う位置に計11箇所確認されたが、径の大きいもの（P2、P7、P10）と比較的小さいものがみられる。これらのビット群をすべて柱穴とすることはむづかしい。P7は、床面より8～12cmの厚さで黒色土の混じるローム層が貼られていた。P4とP11は後述する炉址状土壌の長軸に對しほぼ対称的な位置にあり、形態や深さが近似していることから、この施設にかかわる対のビットとも考えられる。堅穴のほぼ中央部に平面が隅丸長方形を呈する長さ1.4m、幅80cmの大きな掘り込みが認められた。覆土は、焼土粒子、ローム粒子、炭化物片等の混じる黒褐色土を主体としている。底部および下部の壁面がわずかに熱を受けて固くなっており、底部近くに加熱を受けた礫も認められた。またその掘り込みの肩部に2個の大きな河原石が斜めに落ち込むような状態で検出された。そのうちの1個は、厚さ10cm、径33×29cm大の偏円形を呈する砂岩質のもので、両面に凹穴、磨痕が認められる。この2個の河原石が原位置を保っていたかどうかは明らかでないが、上述したような様態および観察結果から、この掘り込みをここでは炉址状土壌と報告しておくことにしたい。この外、柱穴P8とP9の間に長方形の河原石の配石が認められた。これはP8の一部を覆うような位置にある。原位置を保っていたとすれば、このビットの使用後に置かれたものとする事ができよう。

ビット	P1	P3	P5	P7	P9	P11
	P2	P4	P6	P8	P10	
深さ	32	40	66	43	67	44
	36	45	38	59	50	

表1 第2次調査1号住居址
ビットの床面からの深さ

遺物は、堅穴の西側の壁近くに勝坂式Ⅲ期の土器が横転して土圧で押しつぶされた状態で出土した。これ以外の土器はいずれも破片で覆土および炉址状土壌から出土している。石器は、打製石斧8、石匙1、横刃形石器1、スクレーパー1が各々覆土中より出土している。出土土器より1号住居址は勝坂式Ⅲ期の段階に属するものと考えられる。

土壌・小ビット A-1～A-4ビットは、調査区の南側で東西方向にはほぼ等間隔に並ぶ小ビットである。平面形は偏円形を呈し、掘り込みは比較的浅い。柱痕跡は検出されていない。また出土遺物はみられなかった。

A-5・A-6ビットは、A-1号住居址の東側に位置する土壌である。A-5ビットは平面が卵形を呈し、舟底状の掘り方を有する。A-6ビットはやや不整な卵形の平面形を呈し、底部はやや傾斜する平坦面をなす。双方とも明らかな人為的堆積の様相をうかがえず、また出土遺物もない。住居址に付随する貯蔵穴的な性格の土壌であろう。

A-7～A-10ビットは、調査区の東側部分に南北にならぶ小ビットで、A-8ビットがやや深いほかはいずれも掘り込みは浅く、出土遺物はみられない。

B地点（図面2）

B地点では、低い段状の遺構および溝状遺構が確認された。ここで段状の遺構と称したのは、西から東に2条の段を有しながら、ゆるやかに傾斜するロームに掘り込みをもつものである。このローム面は非常に固くしまった平坦面（南北方向には）で、自然堆積によるローム層上面とは異なる。現地表面からの深さも近隣のA地点にくらべはるかに深く標高75m前後である。またこの面の直上は粘土層を貼り付けた状態が認められ（図面A-A'）、さらに東側の溝状遺構の覆土上層面にも施

されていることから、溝状遺構より新しい時期の遺構ととらえることができよう。ただし、これに伴う遺物は出土していない。

東側の縁には溝がほぼ南北に走っているのが確認された。横断面は立ち上りの中位にテラスをもちいわゆる栗研堀に類するものである。覆土からの出土遺物はない。なお、B地点の表土から打製石斧1点が出土している。

E地点（図面2・7、図版4）

E地点では、土塼・小ピットが計12基確認された。調査範囲が限定されているため、ピット群の全体的な配置は把握できなかった。

E-5とした土塼は平面が不整形を呈し、他の小ピットとは別個の存在である。E-5土塼をのぞく多くの小ピットは、円形もしくは偏円形を呈する浅い円弧状の掘り込みである。柱痕跡を残すものは検出されていない。ただし、E-8、E-9ピットは他にくらべやや深い。これらの土塼・小ピットの覆土からの出土遺物はない。表土からは縄文中期の土器破片数点、打製石斧2点、敲打器2点が出土している。

3. 第3次調査

この調査によって検出された遺構は、竪穴住居址1軒、土塼1基である。土塼は住居址の北東2.5mに存する。南北1.5m東西1mの楕円形で浅いものである。ここでは住居址を中心に説明を加える。

第1号住居址（図面8・9、図版5～10）

調査地の中央部北寄りD2、D3地区にまたがって検出された。埋土は、上下2層に区別される。上下層とも黒褐色土で焼土粒を含むが、下層は茶褐色がやや強く、ローム微粒子を多量に含んでいる。平面形は不整形円形を呈し、建替え、拡張、外部施設等は確認されなかった。規模は南北方向を長軸とする5.3m、それに直交して短軸4.8mを測る。床面は平板的でよく踏み締められており、北側に対して南側はやや低いが比高差は最大10cmにも満たない。また検出面から床面までの深さは、25cm前後である。軸部の構成は、直径20cmの柱を不等辺5角形に配して、梁を架橋するものとみらる。柱掘方は不整形円形で40～60cm、深さ60～80cmを測る自律性の高いものである。軒廻りには、壁際に掘り込まれた深い周溝（10～30cm）が巡らされ、その中に直径15cmの柱が軸部の各柱と相対する位置およびほぼ中間に建てられている。ただし東辺の一部には認められない。内部施設は、北寄りの中央に炉体土器を埋設する石囲炉、軸部南辺外側の中央位に存する埋甕の2箇所である。

家屋の施設

次に、家屋の施設とその配置のあり方、および軸部と軒廻りを調査結果から検討してみたい。

石囲炉（図面8・9、図版6） 石囲いの一部を除いて良好な遺存状態である。平面形は不整形円形を呈し60～70cmである。この部分は浅いテラス状の掘方となっている。その下部に炉体土器を埋設する上部直径約50cmの上方へ開くティバー状の深い腰部をつくっている。さらにこの下方は細長

く三角状に掘り込まれており、床面より約50cmを測る。上記の三段に区分される掘方が観察された。テラス状部は、細長い河原石15～25cmを用いて炉体土器を囲み、ティバー状部には炉体土器を安定させるべく裏込めを施している。この裏込めは、焼塊して炉体土器をしっかりと掘方に据えつける役割を果たしている。当然ながら上部の石囲いは、石の比熱を利用して炉体土器や炉全体の保温効果を期待するものであるが、最下部に設けられた細長い掘り込みは、若干の焼土粒を混える ROOM で、強度の加熱は観察されなかった。おそらく湿気を防止することや、上部からの入水を逃すための工夫と考えられる。

埋壘（図面8・9、図版7） 掘方は炉址の平面形と同様、不整楕円形（60×70cm）を呈するが約20cmの浅いものである。埋壘は掘方の北寄りに埋設されており、南側に向かって5cm程低く据えられている。北半部は口縁部より下位が破片となって遺存したのみで、南半部の良好な遺存状態とは対照的である。埋土は黒褐土が大半で、壁際にROOMブロックを混える箇所もある。埋壘北半部の破損については、炉址よりすぐれて後代の影響が看取されないため、あるいは当時の生活様式の中で生じた可能性も指摘される状況にある。

軸部と施設の設定

さて、当家屋の軸部を形成する5本の柱のうち、頂点となる北から右回りにA～Eと記号で呼称すれば、B柱と隣隣のA・C柱が等間であること。同様にE柱と隣り合うA・D柱も3cmの差で等間に設定されていることが留意される。すなわちA・Bの柱間=2.05m、B・Cの柱間=2.05m、A・Eの柱間=1.85m、E・Dの柱間=1.82mである。五角形の底辺部となるC・Dの柱間は最も広く2.65mを測る（図面8・図版5）。各々の柱間は柱痕跡によって位置が確定であるため、主要な柱位置を決定してゆく順序と計画性を追求するための手掛りを与えている。さらに、炉址と埋壘の位置は軸部と一定の関係が認められる。まず炉体土器はB・E柱の軸線上中央部に設定されている。また埋壘は出入口とみられる間口が広いC・Dの柱間の中点で、A柱と結んだ南北軸にかかって西寄りに埋設されているのである。しかし、炉体土器は前記の埋壘を通る南北軸とは軌を同一にしていない。つまり両者は各々の柱間によって規定されていると考えられる。

軸部と軒廻り

次に軸部の柱穴の観察結果を述べてみよう。（図面8、図版9・10）柱穴はほぼ同一規模であるが、Cは小形で下部にしたがって細くなっている。掘方の壁面が整えられたものはDのみで、大半はかなりいりくんでおり不整形である。しかし、いずれの柱穴も深さは充分であり、最も浅いBでも床面から60cm、深いEは80cmを測る。柱痕跡は黒褐色で若干の焼土と炭化物を混えるものとして検出された。柱の整形はやはり不備である。この痕跡は直径20cm前後で、ほぼ垂直に建っていたことが断面観察結果から明らかである。したがって抜き取られた痕は全く認められない。これを支える両側の埋土は、黒褐色土で必ずROOMブロックが混っており、比較的よく締まっている。

柱掘方と柱位置との関係で注目されることが2点ある。すなわち、①柱痕跡は必ずしも掘方の中央部になく、②その下端にも達していないものがあることである。今回検出したもので典型例は、柱穴Dである。まず平面では掘方の南に寄せられ、高さでは10cm程も上げられている。この間には硬いROOMブロックが詰めこまれ、柱のあたりも検出された。掘方内での柱間や高さの調整が認めら

れる。このことは、当時の建築技術の水準を推量する手懸かりとなる。

軒廻りの柱は、先記の通り周溝の中に建てられたもので、柱間は1.85mから85cmまで様々である。ただ、北辺と南辺は各々異なる柱間であるが、2間分を等間としている。すなわち、柱穴Aと埋堯の各々西側に接して建てられた柱は、その両脇の2間分が前者1.65m、後者1.1mの等間に割付けられているのである。また、埋堯と柱穴Cの東側との柱間は2間分で2.3mを測る。したがって、この西側の柱間1.1mとほぼ同じ柱間がとれる配置になっている。しかし、埋堯の東側を広く1.45mとしているため、もう1間分は85cmと極端に狭くなっている。ちなみに埋堯と柱穴Cの間も1.4mを測り、同様の空間が確保されている。軒廻りの柱位置で留意される今一点は、北南辺は対照にはなっていないが、2間分を等間に割付けていたことである。この両辺は、東西辺に比し恐らく小屋掛が違うものであったとみられる。小屋組構造をある程度復元することも可能かと思われるが後考としたい。

V 遺 物

1 土 器 類

A 土器の分類

第2次・3次調査出土土器個々の分類別への帰属は後述することとし、まず土器分類の説明を述べることにする。出土量が少なかったが、土器の所属時期にはかなりばらつきがみられる。また、今回の報告には表採土器も含まれているが、これは表面採取された土器の中にも良好な破片が見られるからである。

土器の分類にあたっては、時期別に大別し、これを群とした。さらに、個々の土器の文様に主眼を置いて細かな類別を行った。これは、第2次・3次調査で出土した土器が大部分小破片のためである。完形品あるいはそれに近い個体は少なかった。また、胴部破片あるいは底部破片で時期の不明確な土器については、それぞれを群としてまとめて扱ってある。

第1群土器 縄文早期撫糸文土器段階

1類土器 糸の間隔は密である。Rの撫糸を施文している土器が多い。夏島式土器である。

第2群土器 縄文早期沈線文土器段階

1類土器 尖底部破片。第1群1類土器の尖底部とは異なる破片であるため区別した。いわゆる乳頭状を呈する。三戸式土器以降の底部破片であろう。

第3群土器 阿玉台Ib式土器段階である。

1類土器 土器胎土に雲母片を混入し、角押文（多くは隆帯に沿って一列施文される）がある。また、口唇に刻みが施される土器や口縁に縦位の隆帯が貼付されている土器がある。口縁のモチーフは枠状を呈し、胴部上半にはジグザグ状の沈線が走っている土器もある。

第4群土器 阿玉台Ⅲ式土器段階。

1類土器 第3群土器1類同様、土器胎土に雲母を混入する。第3群土器とは、器形及び施される角押文に大きな差が見出される。すなわち、大きな波状口縁であり扇状把手の発達が著しい。角押文は幅広である。幅広の角押文と隆帯によって区画された部分には、ジグザグ、あるいはやや斜行する沈線が充填されている。

第5群土器 藤内式土器段階。

1類土器 隆帯で三角形に区画し、両側にベン先状連続刺突文を施している。

2類土器 刻みの入った隆帯と爪形文がある。また、その内側にジグザグ状の沈線が施文される。いわゆる抽象的なモチーフを構成するものと思われる。

3類土器 隆帯に沿って細かな爪形文。あるいは、隆帯上に細かな刻みが入る。本類は縦位の区画を構成するものと考えられる。

4類土器 高い隆帯が口縁部に三角形の区画を構成する土器。隆帯内側に幅広の連続爪形文を施す。

第6群土器 井戸尻式土器段階。

1 a 類土器 口縁部無文で、やや内傾する。円筒形に近い器形になる土器であろう。幅の狭い爪形文が施文されている。

1 b 類土器 口縁部無文で外傾ないしは外反する。爪形文の施文がみられる。

2 類土器 口縁部に爪形文の施文がある。外傾する深鉢形土器の口縁部破片。

3 類土器 刻みのある隆帯、または、爪形文が三角形のモチーフをとる。

4 類土器 内彎する口縁部の内面に細かな刻みの入った円形のモチーフが貼付される。

5 類土器 刻みのある隆帯内側に沈線を充填する。深鉢形土器の胴部上位の破片。

6 類土器 口縁やや外傾し、そのまま底部に至る深鉢形土器。横帯区画内を三角形のモチーフで充填し、爪形文や三叉文を施文する。

7 類土器 縦に走る幅広の隆帯上に矢羽根状の刻みを施す。隆帯間は沈線によるモチーフが見られる。

8 類土器 著しく内彎する口縁部破片。刻みのある隆帯が曲線状の構成をとっている。

9 a 類土器 刻みのある隆帯と楕円の横帯区画が見られる。楕円内は沈線で充填される。

9 b 類土器 横帯区画内を沈線あるいは三角形の隆帯でうめるもの。

10 類土器 口唇部は平坦である。口縁部には縄文の施文が見られ下部には胴部文様帯が展開する。爪形文、沈線による渦巻文、三叉文が充填されている。

11 類土器 口唇部が外側に著しく突出する。縄文、あるいは沈線文、メガネ状の隆帯が施される。

12 類土器 口唇部が外側に突出し、胴部には縄文施文が見られる。刻みの入った縦の隆線によって区画され、ジグザグ状の沈線、三叉文、曲線的な隆帯が施されている。

13 類土器 隆帯と縄文施文の深鉢形土器胴部破片。

14 類土器 内彎する口縁から頸部へかけての破片。隆帯と両側縁に沈線がある。また、隆帯上には押捺がある。

15 類土器 口縁部に広い無文帯を配し、胴部は全体として横帯区画の構成を示すものとみられ、刻みの入った低い隆帯によって区画されている。区画内は沈線によって渦文が施される。また、沈線間には細かな刻みが入る。

16 a 類土器 浅鉢形土器。口縁部はやや外反気味に立ち上がる。口縁には隆帯による楕円状の区画が施され連続刺突がめぐる。

16 b 類土器 無文の浅鉢。口縁が外方に突出する。

16 c 類土器 無文の浅鉢。口唇部平坦で、かなり厚みをもって外傾気味に立ち上がる。

第7群土器 加曾利EⅠ式土器段階。

1 a 類土器 キャリバー状の口縁部をもち、地文として太い条線が施されている。頭部は貼付隆帯によって文様が構成される。

1 b 類土器 波状口縁の深鉢形土器。突起部には把手が付加されているものがある。キャリバー状に口縁が内彎している。文様は、貼付隆帯によって把手から左右に伸びる渦巻文、横位「S」

字文がある。地文は横走する撚糸である。頸部は無文帯となり胴部は縦走する撚糸の地文上に蛇行する隆帯や渦巻文がある。

1 c 類土器 キャリバー状口縁の深鉢形土器。斜行する縄文地上に隆帯によって整った渦巻文が施文されている。頸部にも縄文が施され、頸部無文帯にはなっていない。胴部は沈線によって並行あるいは波状のモチーフが表出されている。

2 類土器 口縁部で外傾する小形鉢形土器。メガネ状文が口縁にめぐる。

第8群土器 加曾利EⅡ式土器段階。

1 類土器 キャリバー状口縁にかなり簡略化された渦巻文が施されている。

第9群土器 縄文施文の深鉢形土器。

1 類土器 外傾する口縁の深鉢形土器の口縁部。縄文のみを施文。

第10群土器 撚糸文施文の胴部及び底部破片。

第11群土器 縄文施文の胴部及び底部破片。

第12群土器 底部のみの破片。

B 第2次調査出土の土器

一 表土及び包含層出土土器 (図面12・13、図版13)

9~14は第3群1類土器。15は第5群1類土器。口縁から頸部へかけての破片。16は第6群5類土器に相当する。17~18は第5群2類土器、19~20は第6群1a類土器。21は、口縁のみの破片であるが第6群1b類土器である。22~23は第6群2類土器。23は、把手ないしは突起部破片。24・26は第6群9a類土器、25は同9b類土器である。27は第6群7類土器に相当する。28は著るしく内彎する口縁部破片。突起が貼付されており、隆帯による曲線的モチーフがそれを囲むように施されている。第6群8類土器である。29~31は同一個体。明赤褐色を呈し、挽成の良好な土器。第6群6類土器として扱った。32~33も同一個体。第4群1類とした。浅鉢形土器の34は第6群16a類土器。35は同16b類土器である。簡略化された渦巻文のある36~38は第8群1類土器。39~45は第11群土器である。

二 第1号住居址出土土器 (図面10-1~2、図面14、図版11~12)

1は第6群12類土器。口縁が外側へ突出する円筒状の土器。2は、Lの撚糸が施された深鉢形土器の胴下部。第10群土器に相当する。46~47は第3群1類土器。本類は住居址出土のほかの土器と比べると時期的にかなり差が大きいものである。48~49は第6群1a類土器。50は第6群1b類土器である。51は口縁付近の破片。刻みの入った隆帯で渦巻状の貼付がなされている。第6群2類土器。52~55・57は第5群3類土器。刻みの入った隆帯や爪形文の施文がある。縦位の区画を構成すると考えられる。54~55では良く観察できる。56は三角形の構成を示すもので第6群3類土器。58は内側に連続爪形文をもつ隆帯が口縁部に三角形の区画を持つもので第5群4類土器。59は口縁部が広い無文帯となる器形の土器で、胴部文様帯が楕円のモチーフをとるものである。第6群9a類土器。60は第6群5類土器。61は59と同様第6群9a類土器とした。刻みの入った隆帯のみ観察できる。あるいは、60のような第6群5類とした土器の破片かもしれない。62は第6群4類土

器。口縁裏面に細かな刻みの入った円形文の貼付がなされている。63～64は第6群11類土器。口唇部は外側に突出するが、口縁は内彎している。63はL R、64にはR L Rの縄文が施されている。65は第9群土器。66～67は炉址内出土土器。口縁やや外傾する深鉢形土器。66にはR L縄文、67にはL R縄文が施されている。67は、横帯区画内を沈線、あるいは連続爪形文で充填している。66には、渦巻文、三叉文、連続爪形文がある。第6群10類土器である。68は第11群土器。R L R縄文の施文がある。

C 第3次調査出土の土器

一 1 包含層出土土器 (図面15—69—81)

69～74は第1群1類土器。Rの燃糸文が多い。75は第2群1類土器。乳頭状の尖底部片である。76～77は第5群2類土器。78は第6群1 b類土器。口縁部の外反が強い。79～80は第6群3類土器。三角形のモチーフをもっている。81は第6群15類土器。沈線間に細かな刻みがある。

一 2 第1号住居址出土土器 (図面10—3—6、図面11—7—8、図面15—82—97、図面16—98—110、図版14—16)

4は第7群1 b類土器。頭部無文帯をもつ深鉢形土器の胴部。貼付隆帯による渦巻文が施されている。3は、第7群2類土器。胴部はR L R縄文。5～6の浅鉢形土器は第6群16 c類土器。特に6の内面には朱の痕跡が観察できる。7は炉体土器。第7群1 b類土器。口縁は4単位の波状口縁。ただし、内2カ所の突起は破損している。突起下部には把手が加えられる。口縁部の地文はLの燃糸文が施されている。渦巻文は把手から左右へ伸びるものと、横帯「S」字の構成をとるものがある。それぞれの突起を正面から観察すると各々渦巻文の構成が異なって見える。胴部は蛇行する隆線がLの燃糸文上に施されている。8は埋設土器。第7群1 c類土器である。R L縄文地上に整った渦巻文がある。7の炉体土器に比べると口縁部文様帯はかなり区画化されていると言えよう。また頭部は無文帯にはなっていない。頭部には沈線によるモチーフがある。最上位の沈線は引き初めと終わりが観察できる。土器を上から見た場合、右回りに引かれている。破片としては、82～83は第3群1類土器。84は第6群11類土器。85～88は第6群3類土器である。89は第6群13類土器。90は第6群14類土器に相当する。91は口縁に無文帯を配し、胴部文様帯は刻みの入った隆帯と刻みを配する沈線によって充填されている。92～93は同一個体。第7群1 a類土器。地文は太い条線。頭部無文帯をもたない。94～96・98は、第7群1 b類土器。98は、波状口縁である。突起部には貼付によって円形の盲孔をもつ隆帯がある。口縁部はLの燃糸上に貼付隆帯によって渦巻文が配される。97は、8と同じ類の口縁部付近の破片。99～100は、第7群1 a類土器。101は、7と同じく第7群1 b類土器に相当しよう。102は第7群1 c類土器。105は、やはり7と同様第7群1 b類土器。地文はLの燃糸文。103～104・106～107は第10群土器。103～104・107はLの燃糸文。106はRの燃糸文である。108～110は第12群土器である。

2. 石器類

第2次・3次調査によって、合計32点の石器類が検出された。その内訳は、第2次調査では、掻器1・打製石斧13・横刃形石器1・石匙1・敲打器2である。第3次調査によって、ナイフ形石器

2・ポイント1・打製石斧7・磨製石斧1・磨石1・敲打器2である。第2次・3次調査を通じて打製石斧の占める割合が多いことがうかがえる。

本遺跡から出土した打製石斧は、第2次調査は完形品1・破損品12。第3次調査は完形品6・破損品1の計20点である。このうち打製石斧は大旨、次の3つに大別することができる。

A類：刃は直線に近く、頭部幅と刃部幅との差があまりなく、厚さは他の形態にくらべて厚いもの（短冊形）。

B類：頭部幅と刃部幅との長さの差が大きいもの（楕形）。

C類：上刃と下刃があり、胴部の幅が狭く挟られているもの（分銅形）。

A 第2次調査

一 第1号住居址出土の石器類

(1) 掻器（第4図1）

チャートを石材として用いている。右側上方より大きく剥離し、さらに小さい調整剥離を両側と刃部に施している。裏面は右側に自然面を残し左側上方から大きく剥離し、調整剥離を施している。長さ4.2cm、厚さ0.7cm、刃幅1.4cm、重さ15gを測る。

(2) 打製石斧（図面17-1～7、図版17上）

A類（図面17-1～5）

1は粗粒硬砂岩を石材としている。長さ10.5cm、頭幅3.2cm、胴幅3.3cm、刃幅2.9cm、厚さ2.5cm、重さ110gを測る。正面は胴部左側から大きく成形剥離を加え、両側から調整剥離を施している。裏面は両側から成形剥離を加え同じく調整剥離を施している。両側面ともつぶしが表面にまで及んでいる。断面は円形に近く身が厚い。2は中粒硬砂岩を石材とし刃部を欠失する。残長11cm、頭幅3.5cm、胴幅4.9cm、厚さ2.4cm、重さ135gを測る。裏面は胴部中央部右寄りに自然面を残し、左側から大きく成形剥離を加え、両側から調整剥離を施している。正面は両側から大きく成形剥離を加え、調整剥離を施している。3はホルンフェルスを石材とし頭部を欠失する。残長7.9cm、厚さ2.3cm、重さ135gを測る。裏面は右側中央部と左側刃部より大きく成形剥離を加え両側から調整剥離を入念に施している。胴下半から刃部にかけて線状痕が認められる。正面は両側と刃部から大きく成形剥離を加え、調整剥離も裏面と同様入念に施している。刃部は非常に鋭利に作られている。4は中粒硬砂岩を石材とし胴下半から刃部を欠失する。残長7.0cm、頭幅4.5cm、厚さ2.3cm、重さ90gを測る。正面は右側上部と左側より大きく成形剥離を加え、調整剥離を施している。裏面は両側から大きく成形剥離を加え、調整剥離を入念に施している。5は砂質頁岩を石材とし頭部と胴下半から刃部を欠失する。残長5.1cm、厚さ1.0cm、重さ40gを測る。正面は右側上部と左側より大きく成形剥離を加え、調整剥離を施している。裏面は両側から大きく成形剥離を加え、左側と右側下方より調整剥離を施している。

B類（図面17-6・7）

炉址より出土。中粒硬砂岩を石材とし胴下半より刃部を欠失する。残長7.0cm、頭幅3.2cm、厚さ1.3cm、重さ55gを測る。正面は右側と左側上部より成形剥離がなされ、右側にはあまり丁寧で

ない調整剥離が見られる。裏面は両側から成形剥離がなされ、左側から調整剥離を行なっている。全体的に風化が激しくもろい。

7はP5より出土。細粒砂岩を石材とし刃部の一部を欠失するが、ほぼ完形である。残長8.5cm、頭幅3.3cm、胴幅3.6cm、厚さ0.8cm、重さ45gを測る。正面は右側上方より大きく成形剥離され、右側を調整剥離している。裏面は頂部より胴部下半左側まで自然面を残す。

(3) 横刃形石斧(図面17-9)

粗粒硬砂岩を石材として用いている。長さ7.2cm、厚さ0.8cm、重さ40gを測る。正面及び裏面刃部にあまり丁寧ではないが調整剥離を加えている。風化が進んでおり正真の判別は決し難い。

(4) 石匙(図面17-8)

ホルンフェルスを石材として用いている。薄い剥片を用い、刃部には調整剥離が加えられたと思われる。風化が激しく観察は困難である。挟り部は左右とも浅く同様な角度で入っている。箆型と思われる。

一 二 各地点出土の石器類

(1) 打製石斧(図面18-10~15, 図版18上)

A類(図面18-10~14)

13はB地点より出土。砂質頁岩を石材として用いており、胴下半から刃部を欠失している。残長8.1cm、頭幅2.1cm、厚さ1.6cm、頭幅3.6cm、胴幅3.5cm、刃幅3.6cm、厚さ1.5cm、重さ65gを測る。正面は両側から調整剥離を施している。裏面も正面同様、調整剥離を行なっている。

10・12・14はE地点より出土。10は粗粒硬砂岩(細礫岩)を石材とし胴下半から刃部を欠失する。残長7.4cm、頭幅4.8cm、厚さ1.7cm、重さ95gを測る。正面は両側から軽く成形剥離を加え、調整剥離を施している。裏面は両側と頭部から成形剥離を加え、同じ方向から調整剥離を施している。正面は殆んど全面に自然面を残す。12は砂質頁岩を石材として用いており、胴下半より刃部を欠失する。残長6.1cm、頭幅4.0cm、厚さ1.5cm、重さ50gを測る。正面は右側から大きく成形剥離を加え、両側から調整剥離を施しているが、左側の方が入念である。裏面は右側上方と左側より大きく成形剥離を加え、左側から調整剥離を施している。14は中粒硬砂岩を石材として用いており、胴部中央の破片である。残長2.5cm、重さ40gを測る。正面は自然面を残し両側から調整剥離を行なっている。裏面は両側より調整剥離を行なっているが、あまり丁寧ではない。

11は表採品である。中粒硬砂岩を石材として用いており、頭部の一部分と胴下半から刃部を欠失する。残長5.5cm、厚さ1.6cm、重さ50gを測る。正面は左側上部と両側より大きく成形剥離を加え、両側から調整剥離を施している。裏面は左側から大きく成形剥離を加え、同じく左側からあまり入念ではないが調整剥離を施している。

C類(図面18-15)

B地点より出土。硬砂岩質の石材を用いており頭部より挟り部までを欠失している。残長9.0cm、刃幅4.4cm、厚さ1.0cm、重さ90gを測る。正面は右側から大きく成形剥離し、左側から粗い調整剥離を加えている。左側挟り部から刃部近くにかけて自然面を残す。右側挟り部は欠失している。裏面は左側から大きく成形剥離し、両側から調整剥離を加えているが、あまり丁寧ではない。右側部

分に自然面を残す。刃部の作りは粗く、右側面には「つぶし」がみられる。

(2) 敲打器

図面中には示さなかったが2点出土している。E地点より出土。1点は断面「三角形」状を呈し、稜線の部分に打痕がわずかに認められる。表面は外縁に傾斜し、片面は自然面である。もう1点は三角状の自然石を用い頂点部分に打痕が認められる。正裏ともフラットな面をもち、台石として用いられた可能性もある。2点とも砂岩質の石材を用いており、前者が重さ151g、後者が222gを測る。

B 第3次調査

一 第1号住居址出土の石器

(1) ナイフ形石器(第4図3・4)

2点とも黒曜石製である。1は縦長剥片を用いて、右側縁を斜めに落とし、先端を鋭く尖らせるように両側縁を基部にブランディングを施している。基部には打瘤が認められる。長さ2.9cm、厚さ0.4cm、重さ1.0gを測る。2は1と同じように縦長剥片を用いて作られている。左側縁を斜めに落とし、先端を尖らせるようにしており、右側縁にブランディングも見られるが、あまり入念ではない。基部は切断して打瘤を除いているが、バルブの痕跡がうかがえる。長さ3.1cm、厚さ0.5cm、重さ2.0gを測る。

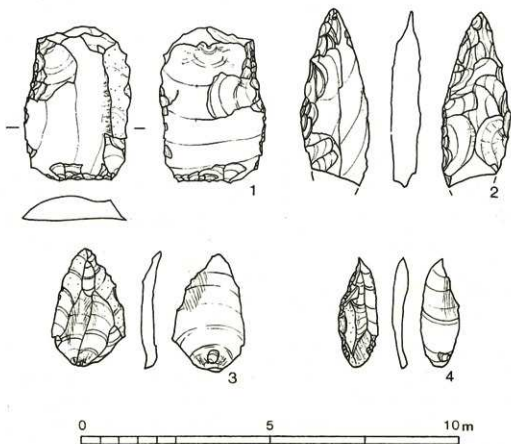
(2) 尖頭器(第4図2)

チャートを石材として用いており、基部を欠失する。残長4.7cm、厚さ0.8cm、重さ5.0gを測る。正面は両側から全体に剥離が及んでいるが、裏面は左側のみ剥離が施されている。

(3) 打製石斧(図面19—19~25、図版17)

A類(図面19—19~20・22・24)

19は中粒硬砂岩を石材として用いており完形である。長さ14.6cm、頭幅2.5cm、胴幅約4.0cm、刃幅3.2cm、重さ270gを測る。正面は右側と左側刃部方向から大きく成形剥離し、調整剥離を施している。左側には頭部より胴部中程にかけて節理面を残している。裏面は右側から大きく成形剥離し、調整剥離を加えている。左側には頭部から刃部にかけて節理面を残している。上下とも刃つぶれが強く摩耗している。両側縁は「つぶし」を入念に行っている。断面は「三角形」を呈する。20は砂質頁岩を石材として用いている。長さ15.5cm、頭幅3.7cm、胴幅5.6cm、刃幅4.9cm、厚さ1.9cm、重さ195gを測る。正面は右側から比較的小さい成形剥離を加え、両側から調整剥離を施しているが、左側はあまり丁寧ではない。裏面は両側からの成形剥離を加えていると思われるが、摩耗しておりはつきりしない。両側からは調整剥離をこまかく加えている。22はホルンフェルスを石材として用いており完形である。長さ7.5cm、頭幅3.5cm、胴幅3.8cm、刃幅2.7cm、重さ65gを測る。正面は頭部近く両側から大きく成形剥離を加え、両側から調整剥離を施している。裏面は両側から大きく成形剥離を加え、両側から調整剥離がみられる。刃部は刃つぶれが激しく摩耗している。全体的に風化が激しくもろい。24は細粒砂岩を石材として用いており、胴下半を欠失する。残長6.5cm、頭幅2cm、胴幅2.5cm、重さ40gを測る。正面は左側上部から大きく成形剥離し、両側から調



第4図 擧器、尖頭器、ナイフ形石器実測図・写真
 1. 第2次1号住、2~4、第3次1号住

整剥離を加えている。頭部右側に磨面を残す。裏面から成形剥離を加えているが、右側の方が大きい。両側から調整剥離を施している。主要剥離面を中央に残している。

B類(図面19—21)

27は輝石安山岩を石材として用いており完形である。長さ10.0cm、頭幅2.0cm、胴幅3.4cm、刃幅4.3cm、重さ55gを測る。正面は左側から軽い成形剥離を加え、両側と刃部に調整剥離を施している。全体に自然面を残す。裏面は右側中程から成形剥離を加えたあと両側と刃部に調整剥離を施している。中心には主要剥離面を残している。

(4) 磨製石斧(図面19—25、図版17下)

輝緑岩を石材に用いており、頭部を欠失する。残長10.5cm、刃幅3.9cm、厚さ3.4cm、重さ265gを測る。正裏面とも両側から大きく成形剥離し入念に磨いている。刃部に刃こぼれが見られる。

(5) 敲打器(図面19—23、図版17下)

23は緑色岩を用いており、基部の一部を欠失する。残長10.4cm、重さ185gを測る。断面は「角形状」を呈し、各面とも平らな自然面である。先端部と先端部寄りの部分に打痕が認められる。先端部は摩耗が顕著である。

一2 各地点出土石器

(1) 打製石斧(図面18—16・17、図版18下)

A類(図面18—17)

17はF3小地区より出土。中粒硬砂岩を石材として用いており完形である。長さ15.5cm、頭幅4.3cm、胴幅5.1cm、刃幅6.6cm、厚さ2.0cm、重さ290gを測る。正面は両側からあまり大きくない成形剥離を加え、両側から丁寧な調整剥離を施している。しかし頂部から刃部までは自然面を残している。裏面は胴部中央に両側から大きく成形剥離を加え、右側下方に小さめの成形剥離を施している。両側から丁寧な調整剥離を加え刃部にまでおよんでいる。両側縁は強い「つぶし」を行なっている。

B類(図面18—16)

16はF3小地区より出土。細粒硬砂岩を石材として用いている。長さ10.7cm、頭幅3.0cm、胴幅4.4cm、刃幅4.8cm、重さ70gを測る。正面は両側と刃部から成形剥離を加え、さらに調整剥離を施している。他の部分は自然面を残している。裏面は左側と右側刃部方向より大きく成形剥離を加え、さらに同様な位置と刃部に調整剥離を施している。主要剥離面を大きく残す。

(2) 磨石(図面18—18、図版18下)

黒褐色土中より出土。約1/2欠失。輝石安山岩を石材として用いており厚さ5.0cm、重さ335gを測る。楕円形を呈すると思われる。半面に平らな面を持つ。磨減痕は風化が激しく明瞭でない。

(3) 敲打器

図示しなかったが1点出している。F3小地区、黒褐色土中より出土。砂岩質の石材を用いている。正・裏面とも外縁が下部に向かって傾斜しており、先端部にはわずかに打痕が認められる。断面は逆三角形を呈し、上方部分を欠失している。残長9.7cm、厚さ3.6cm、重さ196gを測る。

参考文献

- 1 柿沼幹夫他『前島、島之上、出口、芝山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集 埼玉県教育委員会1977年
- 2 笹森健一他『志久遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第31集
- 3 鈴木道之助『凶器石器の基礎知識3』柏書房 1981年
- 4 田中英司他『風早遺跡』庄和町風早遺跡調査会 1978年
- 5 谷井 勉他『大山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集 埼玉県教育委員会 1979年
- 6 中島 宏他『塙窪遺跡』埼玉県遺跡発掘調査報告書第31集 埼玉県教育委員会 1979年
- 7 伴 信夫他『茅野市・原村その1・富士見町その2』長野県中央道埋蔵文化財調査報告 1976年

Ⅵ ま と め

1. 遺構について

第2次・第3次調査によって検出された遺構をまとめてふれる。両調査は、堺窪遺跡の南西半部の一角を点状に調査したものであるが、台地南西縁部より近い第2次A・Eの各地点と第3次調査地区から住居址と土壌が検出された。このうちA地点東半部の土壌は位置関係から、第1次調査南半部の土壌群に連なるものとみられる。A地点の南辺にそって検出された「ピット」は、3間分7.05m、各柱間2.35mであるが、第3次調査F3地区の北端はその南約5mにはほぼ平行しているため掘建立柱建物と考えられるとしても、南北方向は6mを越えない小規模なものである。B地点は第1次調査区中央北側4mで南西方向の溝と段状の遺構もみられたが、前回の調査区にはおよばないものとみられる。E地区の土壌は、台地の西側肩部に広がりをもつと考えられる一部であろう。以上によって堺窪遺跡の南西端が一応とらえられた。

さて、第2次調査1号住居址は、楕円形の浅い掘方の中央部に略方形の炉址とみられる施設をもつものである。北辺部は未調査であるが、「ピット」は11箇所確認された。しかし、柱痕跡は未検出である。あえて軸部を想定すれば、「ピット」の配置と規模や土層の観察結果からおおまかに考えざるをえないのである。P7は埋め戻しが認められるものである。これが柱穴であると仮定すれば、同じ堅穴掘方で建替が行なわれた可能性を指摘できる。対になる柱穴は規模からP10・P2であり、北側の未調査部に2本の柱位置が存したとみられ5本を想定できる。次に、やや南によって炉址と平行するP9、P5とP2に柱を建てた段階が考えられる。このいずれの場合にも南側のP11、P3、P1、P4は主要な軸部となっていないのである。したがって、4本の柱は、出入口を架構するためのものとみられ、建替に際しても同じ位置に出入口がつけられていたことを示している。

ところで、第3次調査で検出された住居址はⅣ-3で記したとうり建物の内部施設も含めた総合的な計画性が認められ、軸部には梁を架構するための考慮も観察された。当時の建築技術水準を推し量る手懸りを得たのである。ただ、柱の成形は根元に関してであるが、丁寧な調整は行っていないとみられる。しかし、このような検出例は、特殊とも言える状況下にある。現状における縄文時代個々の堅穴住居址の研究は、主として、土器の水平、垂直分布等から土器の埋沈過程を復元して人間の活動行を追跡する調査が行なわれている。しかし、同時に建物の基礎構造を重視する調査方法が行なわれるならば、おそらく堺窪遺跡第3次調査で検出された事実関係は、特殊な事情からやがて多くの事例になるであろう。

2. 出土土器について

まず、第2次調査第1号住居址出土土器から述べることにする。本住居址出土土器の66・67は炉址内出土の土器である。口縁部に縄文を施している。そして、胴部文様帯は横帯区画を構成するも

のと思われる。また、個々の文様要素は三叉文、渦巻文が見られる。これは、炉址内出土の土器が井戸尻式土器段階であることを示している。膳棚12号住居址(註1)、中山谷1・2号住居址(註2)、貫井南5・15住居址(註3)などの井戸尻Ⅱ式土器段階相当であると考えられる。1は、円筒形の器形で口縁が外側に突出している。66・67のように胴部文様帯系の土器である。井戸尻式土器段階の胴部文様帯系の土器は多様な内容をもっているが、本例もそのひとつの例である。井戸尻Ⅱ式土器段階と思われる。そのほか、破片の59は口縁部が広い無文帯となるものである。膳棚12号住居址(註1)出土の土器で深鉢11としてとらえられている土器に相当しよう(註4)。52~55・57は、縦位の区画を構成するものと考えられる。岳の上SB1・SB3(註5)などの藤内Ⅱ式土器段階であろう。また、本住居址からは、阿玉台式土器がみられる。ただし、炉址内出土66・67とは時期的に大きなへだたりをもつ。阿玉台Ⅱb式土器である。特に46は、藤の台遺跡4号住居址(註6)出土の第7群3類土器に類似している。指頭庄真と貼付文を施し、区画文をもたないものである。

次に第3次調査第1号住居址出土土器について述べることにする。7は炉体土器である。口縁部に横位S字文をもち、頸部は無文帯となっている。胴部は隆帯が蛇行して垂下している。また、口縁は4単位の波状口縁で把手も付加されている。頸部無文帯の有無に基準を置くならば加曾利EⅠ式中葉段階である(註7)。本例は4とともに、西原15号住居址(註8)、花影6号住居址(註9)段階と言えよう。頸部無文帯の有無を基準とする考え方は神奈川編年(註10)にもみられる。また、安我子昭二氏による東京・埼玉編年(註11・12)では、頸部無文帯の有無を基準として区別された神奈川第Ⅰ加曾利E期と第Ⅱa加曾利E期を同じ段階として扱っている。頸部無文帯の有無は、関東東部のクランク状の文様と関東西部の横位S字状文とに代表される深鉢の文様構成上の違いという視点があるからである。埼玉県東部地域は、関東東地方の様相に近いとの指摘(註7)もあるが、そういう意味で西原18号住居址(註8)における、下総台地に多く類例の求められる第Ⅲ類土器bと頸部無文帯が確立した同cのあり方が注意されるであろう。両者は一括して出土している。8は、埋甕である。7とちがって地文は縄文である。口縁部文様帯は、かなり区画化されている。また、渦巻文も整っている。明らかに7よりも新しい要素をもった土器と言えよう。頸部が無文帯にならないことも大きな特徴である。加曾利EⅠ式後葉段階(註7)であろう。そのほか、本住居址の覆土からは、89・91のような勝坂式土器最終末段階の破片が出土している。7の炉体土器の時期的位置づけに関連する土器である。また、3・5・6は、加曾利EⅠ式土器を構成する要素として認められる土器である。以上、第2次調査第1号住居址および第3次調査第1号住居址出土土器のまとめとしたい。

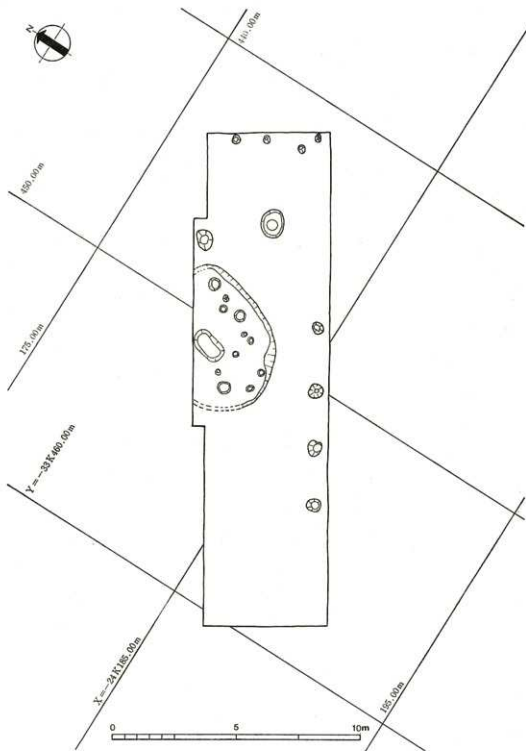
最後に、第2次・3次調査出土の表土採取・包含層出土土器について2・3述べておきたい。15は口縁の内彎する深鉢形土器の破片。宮田A-4号址(註13)などの段階であろう。藤内Ⅰ式段階に位置づけておきたい。17、18、76、77は抽象文系統の土器と思われる。藤内式段階とした。29・30は横帯区画を示す円筒形の土器。井戸尻Ⅰ式以降であろう。32・33は阿玉台Ⅱ式土器。幅広い角押文が隆帯に沿って施されている。

注

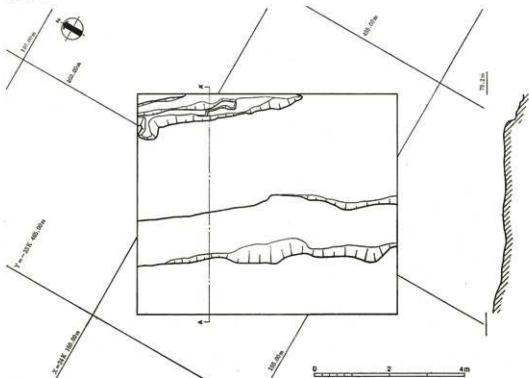
- (1) 岩井住男他『勝棚』埼玉大学考古学研究会 1970年
- (2) 肥留間博他『中山谷』小金井市文化財調査報告1 1971年
- (3) 安我子昭二『貫井南』小金井市貫井南遺跡調査会 1974年
- (4) 谷井 彪「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察(前)」『信濃』第29巻第4号 信濃史学会 1977年
 〃 「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察(後)」『信濃』第28巻第6号 信濃史学会 1977年
- (5) 服部敬史『岳の上遺跡』東京都西多摩郡日の出村文化財保護委員会 1972年
- (6) 藤の台遺跡調査団『藤の台遺跡Ⅲ』藤の台遺跡調査会 1980年
- (7) 宮崎朝雄「加曾利B式土器について—埼玉県出土土器を中心として—」 『奈和』第17号 奈和同人会 1979年
- (8) 宮崎朝雄『加倉・西原・馬込・平林寺』東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 埼玉県遺跡調査会 1972年
- (9) 谷井 彪『南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影』埼玉県教育委員会 1974年
- 00 神奈川考古同人会縄文研究グループ「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案」『神奈川考古第4号』神奈川考古同人会 1978年
- 01 安我子昭二他「東京・埼玉における中期後半の各段階の様相」『神奈川考古第10号別冊』神奈川考古同人会 1980年
- 02 「東京・埼玉側からのコメント」 『神奈川考古第11号』神奈川考古同人会 1981年
- 03 宮塚義人他「東京都八王子市宮田遺跡の調査(1)」 『多摩考古12』多摩考古研究会 1972年

圖面・写真圖版

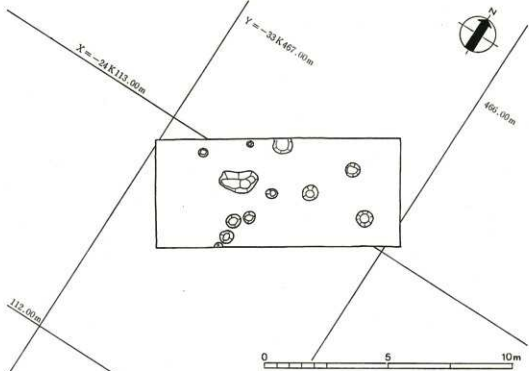




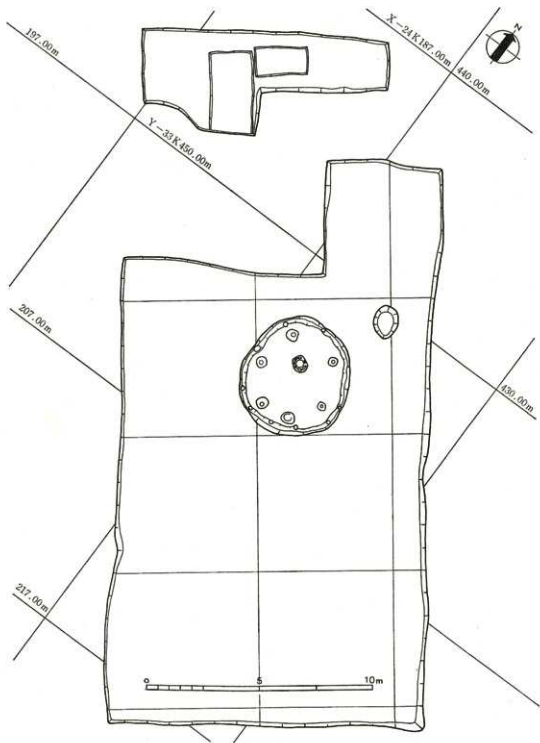
A地点遺構全体図



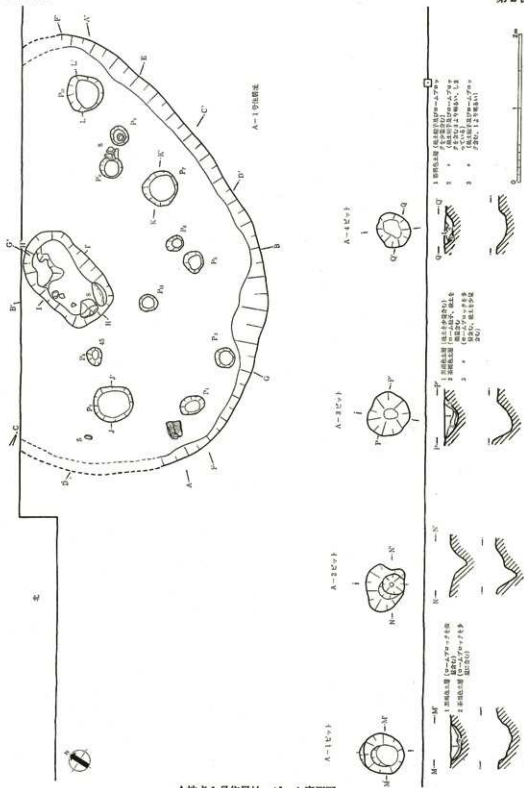
B地点 遺構全体図



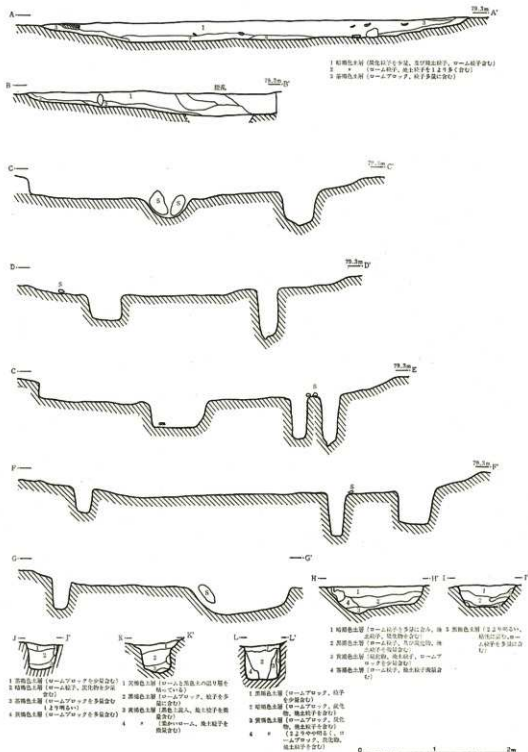
E地点 遺構全体図



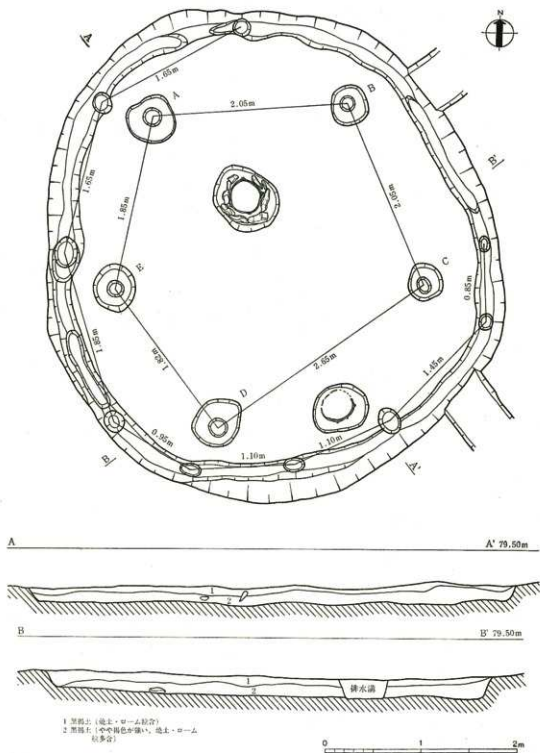
遺構全体図



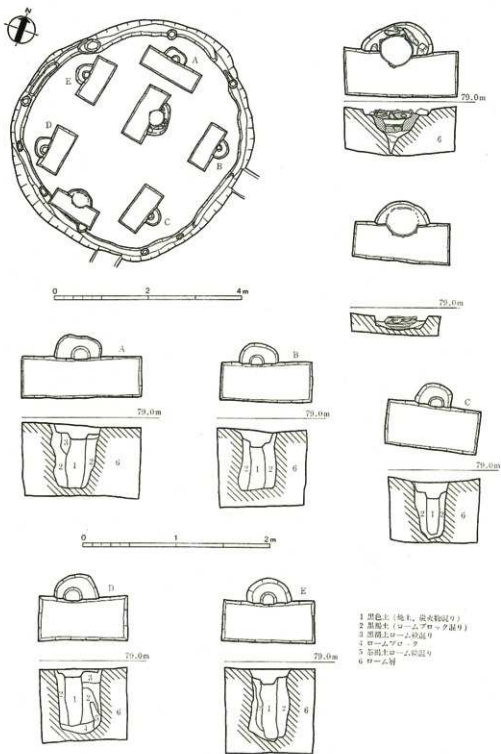
A地点1号住居址 ビット実測図



1号住居址 土層・ビット断面実測図



1号住居址 平面・土層尖測図



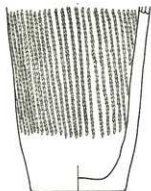
1号住居址 炉址・埋甕・各柱断面実測図

図面10

第2次 1号住



1



2

第3次 1号住



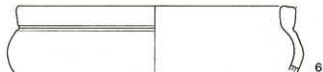
3



4



5



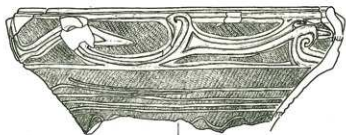
6

第2次・第3次調査 1号住居址出土土器

第3次 1号住



7

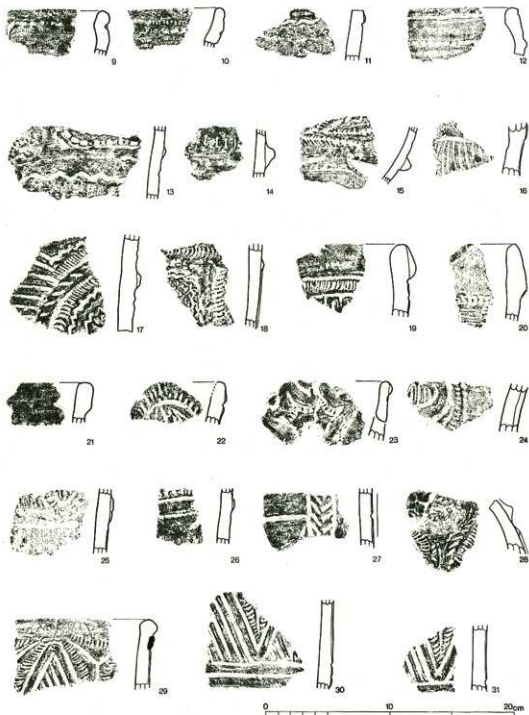


8

1号住居址 炉体土器・埋藏

圖面12

第2次表土・包含層

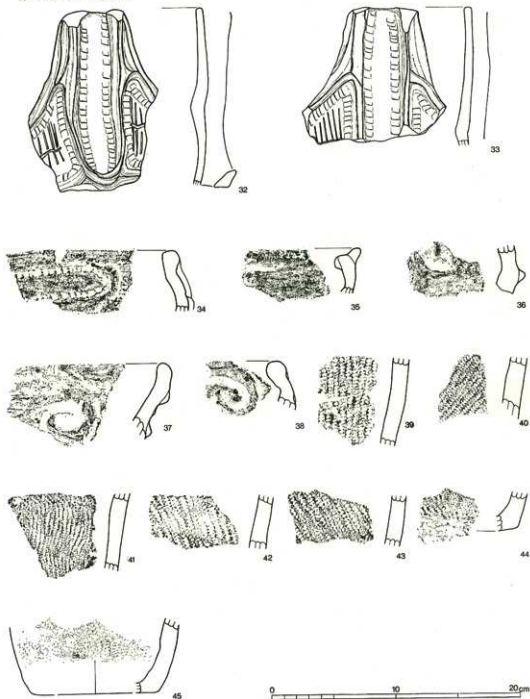


表土・包含層出土土器

台地表採25 A地点表採18・包含層9・10・12~14・16・17・19・20・22~24・27・29~31

B地点表採15 E地点包含層11・14・21・26・28

第2次 表土・包含層



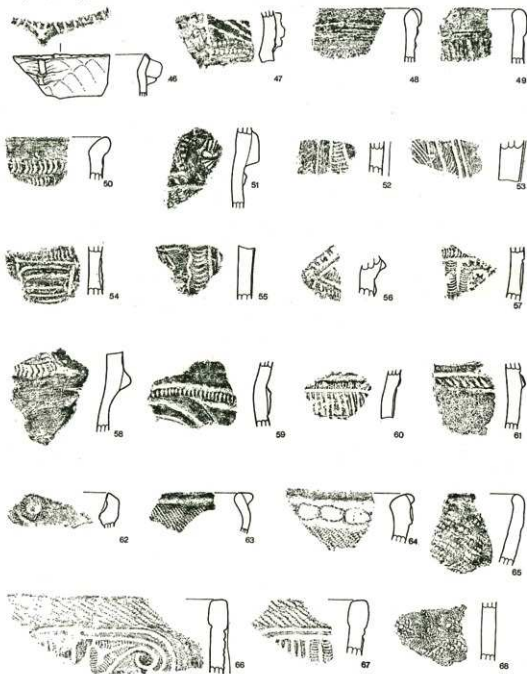
表土・包含層出土土器

A地点表採45・包含層34・35・38~43

E地点包含層32・33・35~37・44

图面14

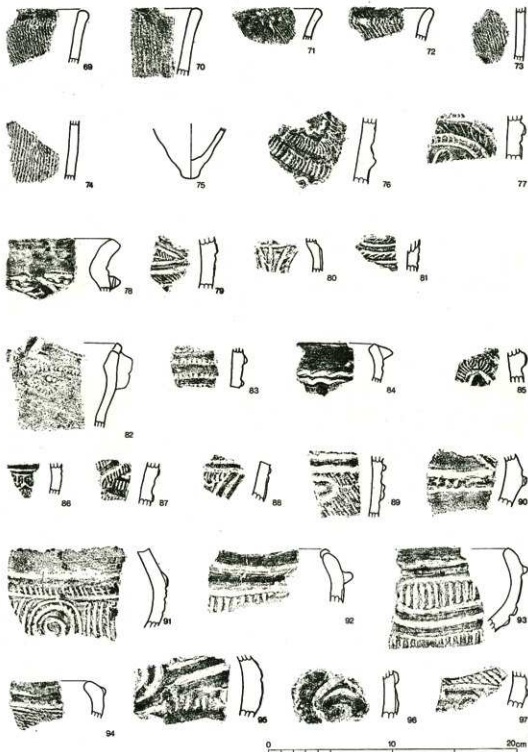
第2次 1号住



0 10 20cm

1号住居址 出土土器

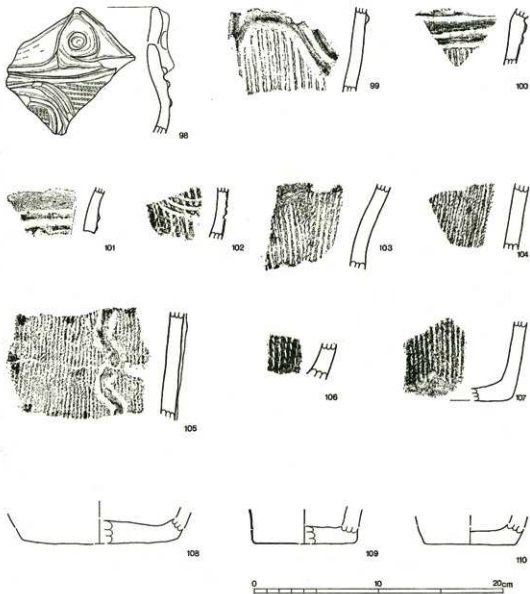
第3次 1号住・包含層



1号住居址・包含層出土土器 包含層69~81・1号住居址82~97

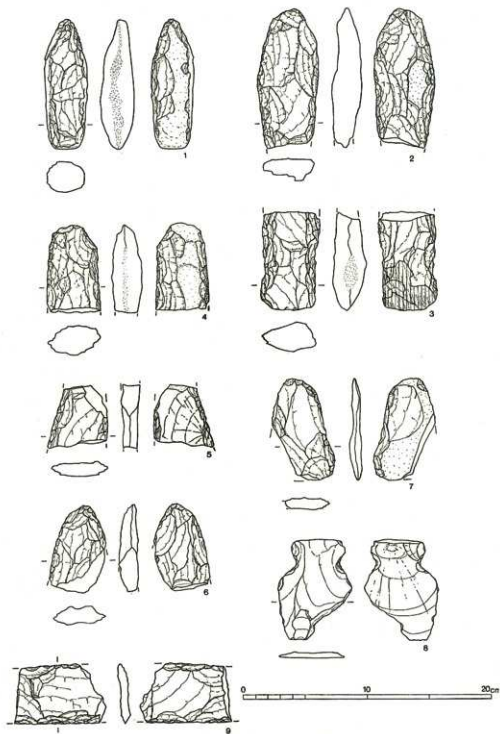
图面16

第3次 1号住



1号住居址 出土土器

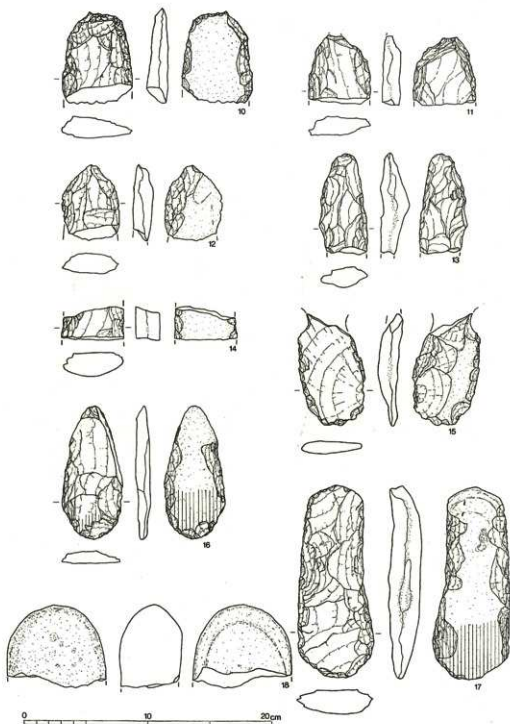
第2次 1号住



1号住居址 出土石器

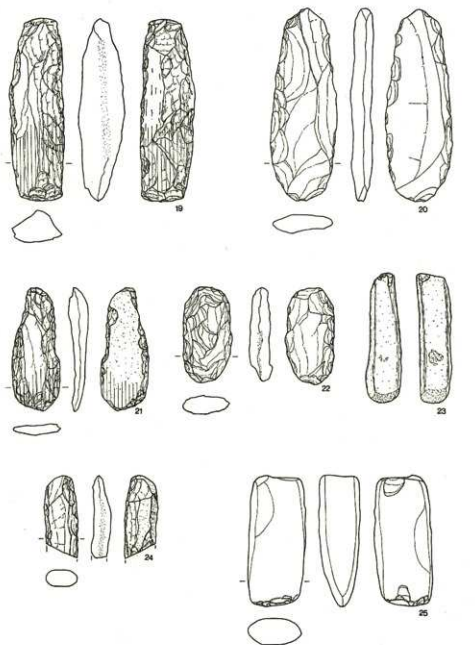
图面18

第2次各地点、第3次小地区



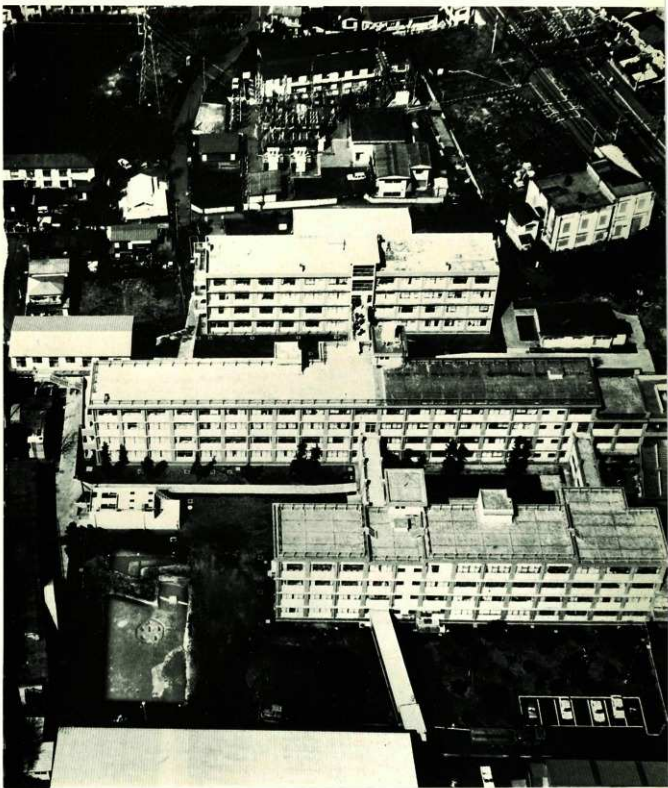
第2次B地点・13・15E地点10・12・14 第3次調査 各地区出土石器

第3次 1号住

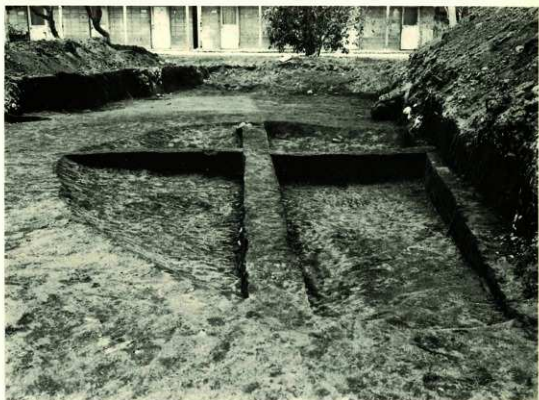


1号住居址 出土石器





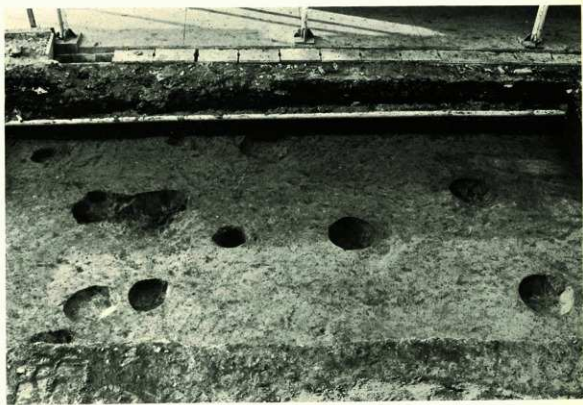
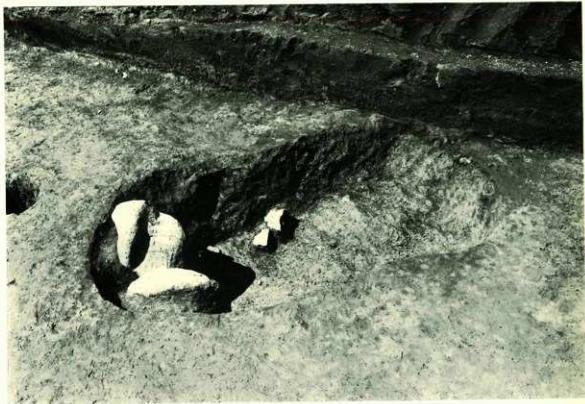
堺産道跡 南西半部 (第3次調査) 1:750



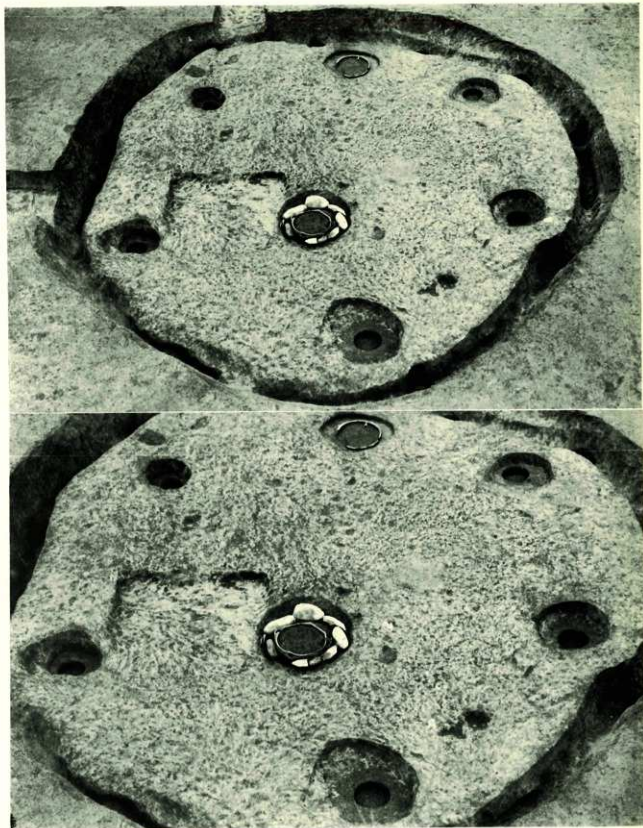
第2次調査1号住居址 上 東・下 南側より



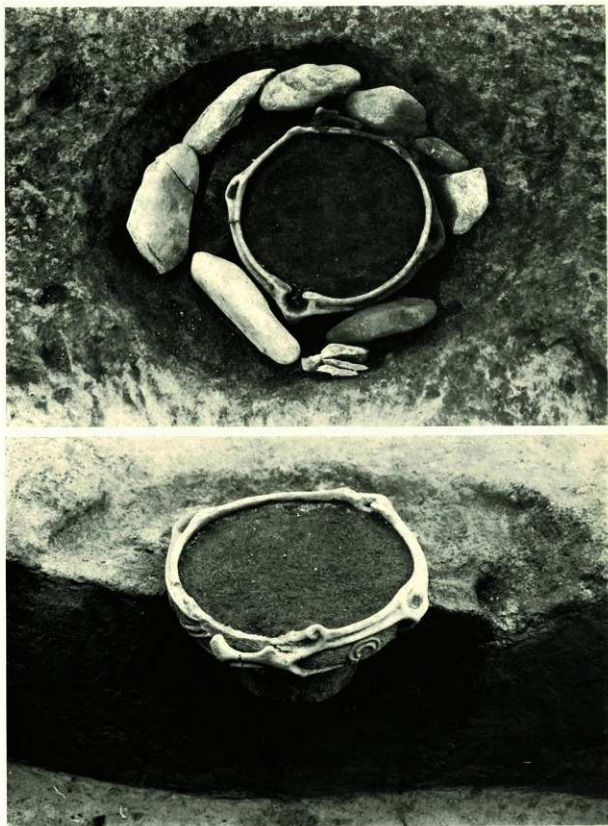
第2次調査1号住居址 上 配石・下 出土土器



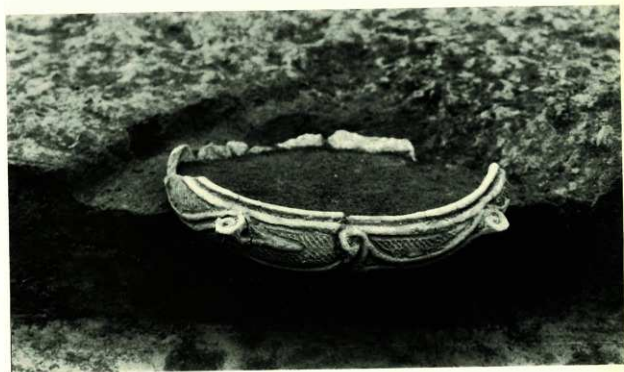
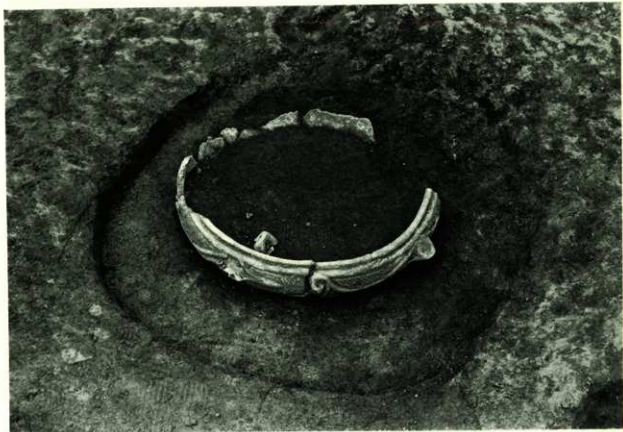
第2次調査1号住居址 上 炉灶状遺構・下 E地点土塊群



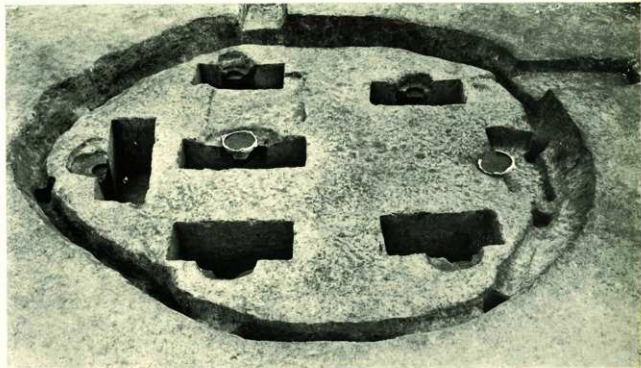
第3次調査1号住居址 上・下 北側より



第3次調査1号住居址 上 炉址・下 炉体土器と掘方



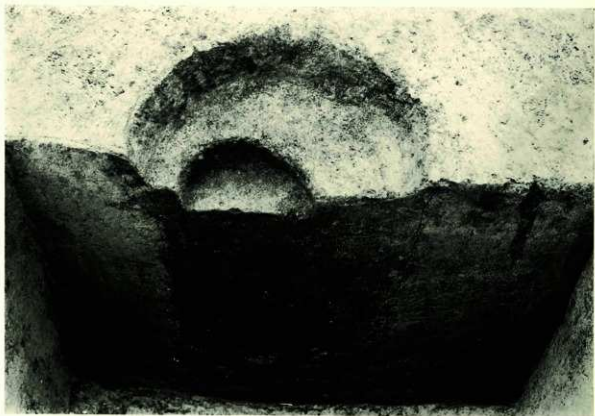
第3次調査1号住居址 上 埋塞・下 埋塞と掘方



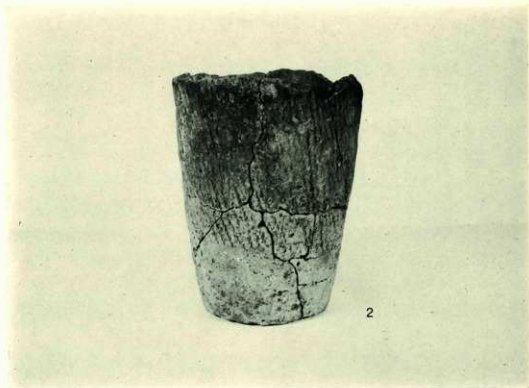
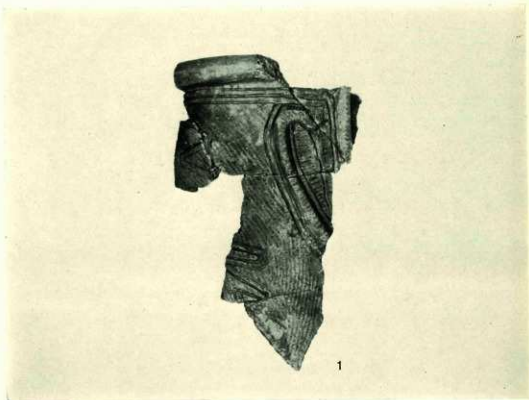
第3次調査1号住居址 上・下 西側より



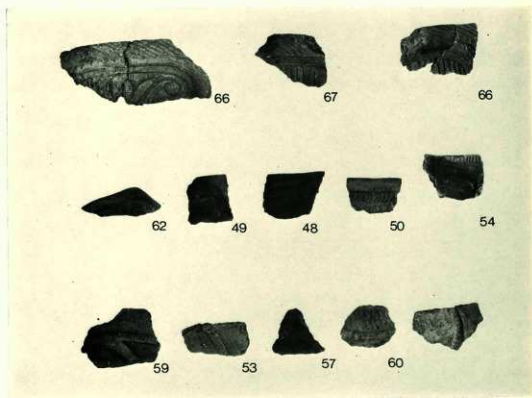
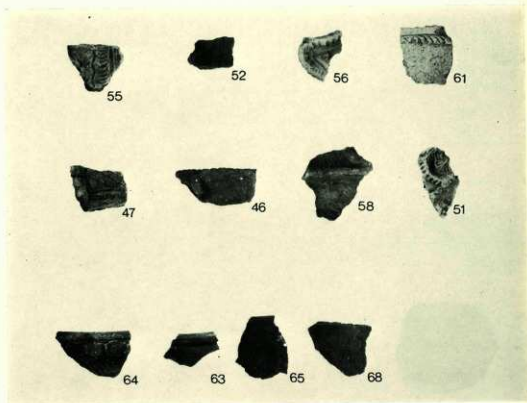
第3次調査1号住居址柱掘方 上 A柱穴・下 B柱穴



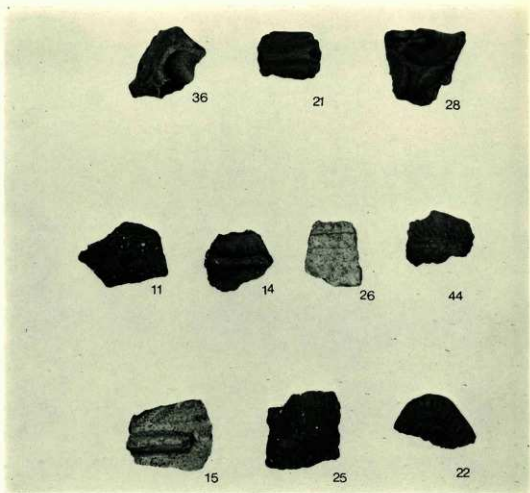
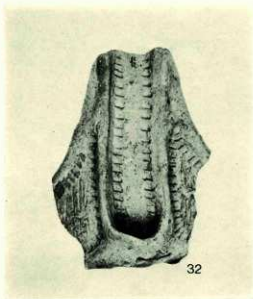
第3次調査1号住居址柱掘方 上 C柱穴・下 D柱穴



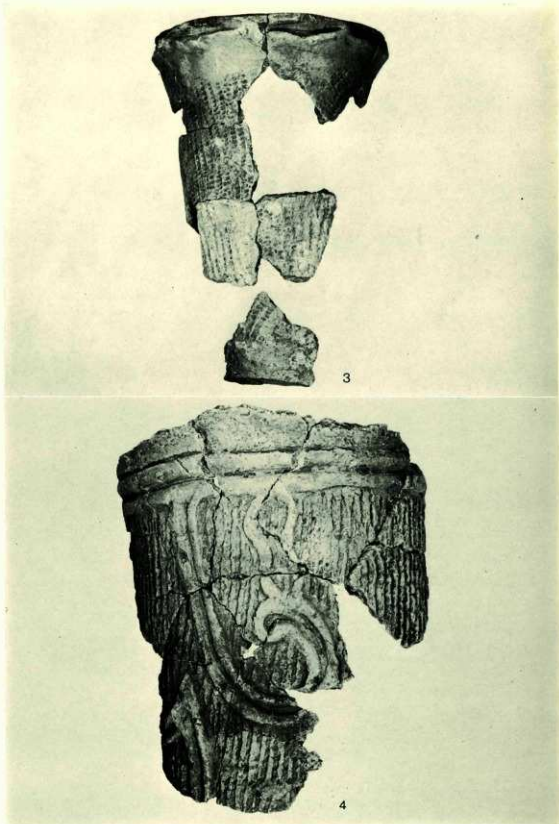
第2次調査 1号住居址出土土器



第2次調査 1号住居址出土土器



第2次調査 上 E地点・下 A地点出土土器



第3次調査 1号住居址出土土器

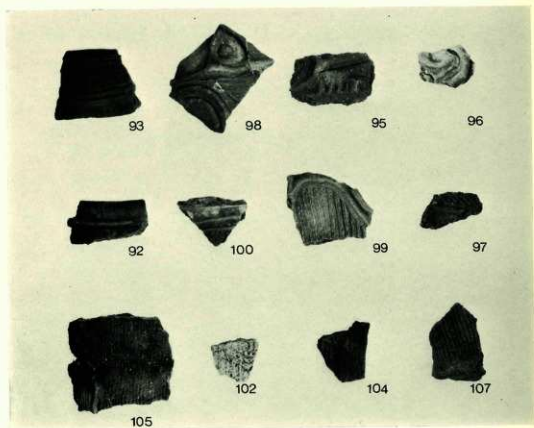
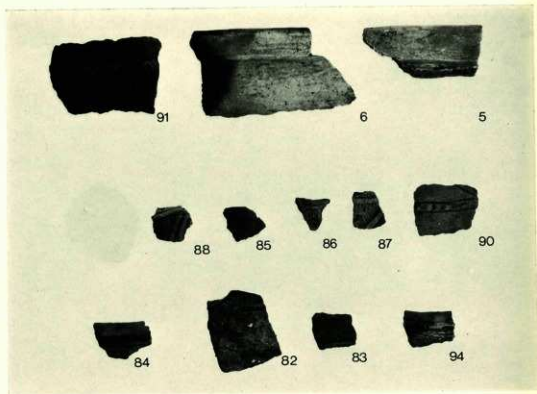


8

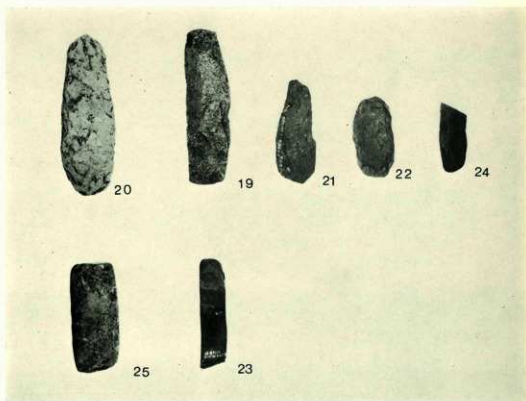
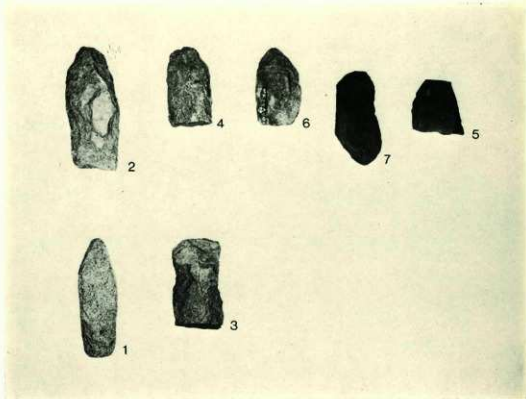


7

第3次調査 1号住居址 上 埋裏・下 如体土器



第3次調査 1号住居址出土土器



第2次上・第3次調査下 各1号住居址出土石器



15



12



11



13



10



14



17



16



18

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第6集

堺 窟 遺 跡 Ⅱ

昭和57年3月20日 印刷

昭和57年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
印刷 株式会社 誠美堂印刷所